

いじめ未然防止 プログラム

(一部抜粋)

心の教育総合センター

平成 27 年 3 月

はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。パソコンやスマートフォン等の普及によって、インターネットを介した時間と場所を選ばない情報発信や文字による会話が、子どもたちの間で日常的に行われるようになりました。一方で、SNS 上での仲間外しや、個人情報の意図的な流出など、いじめにもこれらの機器が利用されるようになり、より陰湿に、より大人から見えにくくなっており、学校は対応に苦慮しています。

平成 25 年に「いじめ防止対策推進法」が施行され、国を挙げていじめ問題に対応することとなりました。同法でいじめの定義も改められ、被害を受けた児童生徒の保護の観点をより強化したものになっています。いじめが深刻化する中、子どもたちの安全・安心を守るため、早期発見、組織的な対応、そして未然防止に係る取組の推進が求められています。

学校においては、児童生徒がいじめに向かわないために、教師が児童生徒の様子を日々観察し、児童生徒が発する小さなサインを見逃さないように対応を続けています。しかし、多くの児童生徒を支援する教師にとって、このような教師主体による個別対応だけでは、いじめの未然防止は難しい現状があります。そこで、兵庫県では「いじめを決して許さない集団づくり実践事業」を実施するなど、児童生徒が主体となっていじめを未然に防止するための取組が進められており、いじめを生まない豊かな心の育成を組織的に行う必要があると考えています。

今回、当センターでは、教員や学生による聞き取り調査や実践校における実態調査を実施しました。それらの結果を基に課題を整理し、子どもたちが自分を大切に、他者と良好な関係を築き、集団での生活を豊かにできる資質を育み、主体となっていじめを未然に防止することを目指した「いじめ未然防止プログラム」を作成しました。

現在、いじめ未然防止に向けて、児童生徒の関係づくりや、豊かな心を育むことをねらいとする組織的な取組が学校ごとに行われていますが、多くの学校が、より効果的な方法を模索している状況にあります。この「いじめ未然防止プログラム」が子どもたちの発達段階、また学校の実情に合わせて、幅広く活用されることを願っています。

平成 27 年3月 27 日

心の教育総合センター

所長 松本 剛

第 1 章

「いじめ未然防止プログラム」について

(1) いじめの実態

ア 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における兵庫県はいじめに関する状況

要 点

- いじめへの対応の在り方だけでなく、いじめを未然に防止するための積極的な取組の実施
- いじめを相談しやすいクラス的环境づくり
- 児童生徒自らがいじめの防止や解消に取り組む集団づくりの推進
- いじめの未然防止等における組織的な対応の充実や教職員の対応能力の向上
- 家庭、地域、関係機関等との連携の推進

(7) いじめの認知件数と解消率

本県はいじめの認知件数は 2,683 件（前年度比 0.80 倍）であり、児童生徒 1,000 人あたりの認知件数は 4.8 件で、全国平均 14.7 件を下回っています。また、いじめ解消状況について、「解消している」及び「一定の解消が図られたが、継続支援中」を合わせた割合が 98.5%（全国は 97.6%）となっており、全国と同様に解消率は高くなっています。

認知件数は、いじめを発見する感度にも左右されるため、数値の変化だけでは実態を把握し難い面もあります。しかし、今もなお、児童生徒の間には多くのいじめが存在しているのは間違いありません。いじめへの対応の在り方だけでなく、いじめを未然に防止するための積極的な取組が望まれます。

(4) いじめ発見のきっかけ

いじめ発見のきっかけとしては、「アンケート調査など学校の取組により発見」（36.7%）が最も多く、次いで「本人の保護者からの訴え」（22.1%）、「本人からの訴え」（16.0%）となっており、学校の取組によって多くのいじめが発見できている一方で、本人からの訴えによる発見は少ない現状です。いじめの状況や辛さを、いじめを受けている児童生徒が自ら教師や保護者に相談する態度の育成、そのために必要な教師との信頼関係の構築、いじめを相談しやすいクラス的环境づくりなどが望まれます。

(5) 学校におけるいじめ問題に対する日常の取組

学校におけるいじめ問題に対する日常の取組については、「道徳や学級活動の時間にいじめに関わる問題を取り上げ、指導を行った」が 87.5%であり、いじめ未然防止にかかる授業が多くの学校で実施されています。一方で、「児童・生徒会活動を通じて、いじめの間

「いじめ未然防止プログラム」について

題を考えさせたり、児童生徒同士の人間関係や仲間づくりを促進した」は 54.1%に留まっています。

文部科学省は、いじめの防止のポイントの1つとして、教職員が陰で支える役割を担いながら、児童生徒自らがいじめの問題について学び、主体となっていじめの防止を訴えるような取組を推進しています。道徳教育や体験教育等による豊かな心の育成だけでなく、児童生徒自らがいじめの防止や解消に取り組む集団づくりが望まれます。

(I) 今後の対応

平成 25 年 9 月にいじめ防止対策推進法が施行され、これまで、学校いじめ防止基本方針の作成や、学校におけるいじめの防止等の対策のための組織の設置など、自治体や学校等で様々な取組が行われています。今後は、本県はいじめ防止基本方針に基づき、未然防止、早期発見・早期対応における組織的な対応の充実や教職員の対応能力の向上を図るとともに、家庭、地域、関係機関等と連携を更に推進していく必要があります。

「いじめ未然防止プログラム」について

イ 平成 25 年度いじめ未然防止に関する聞き取り調査の結果

要 点

- いじめのきっかけには、遊びや喧嘩からいじめに発展するもの、被害児童生徒を仲間はずれにするために意図的に行われているもの、被害児童生徒に対する嫌悪感が元となっているものなどがある
- グループ内やグループ間でのいじめがある
- ネットを利用したいじめが行われている

(7) 調査

いじめ未然防止プログラムの作成にあたり、いじめの対応に携わっている小・中・高等学校の教員並びに、大学生に聞き取り調査を行いました（表 1）。

大学生については、過去を振り返って児童生徒の立場からの意見を答えてもらいました。いじめのきっかけ、態様等についてそれぞれの立場で感じていることを話してもらった後、臨床心理士と学校心理士を含む指導主事と大学教員で討議し、語られた内容の要約、分類を行いました。

表 1 調査対象者の属性

立場	所属	男性	女性	合計
教員	小学校	1	2	3
	中学校	4	0	4
	高等学校	3	1	4
児童生徒	大学生	7	10	17
合計		15	13	28

※平成 25 年 12 月現在の対象者数。今後も調査を継続。

(4) いじめのきっかけと発展

いじめのきっかけと発展の仕方として、以下の 6 種にまとめられました（表 2）。

表 2 いじめのきっかけと発展

項 目	内 容
遊びから発展	遊びとして合意の上でのからかいや身体接触、いじり等が度を超えてしまう（上下関係が生まれるといじめに発展しやすい）
誤解から発展	「呼んだのに無視された」等、些細な誤解によって立腹し、いじめによってその思いを表現する
迷惑感	被害者となる児童生徒の言動によって迷惑感を感じた児童生徒が、いじめによってその思いを表現する（被害者となる児童生徒の問題行動や、言動、コミュニケーション、運動能力の差等）
被害児童生徒の特性	被害者となる児童生徒の身体的な特徴や、発達の特性、言動の内容などを揶揄する
喧嘩から発展	喧嘩をお互いで収め合うことができずに、いじめという形で継続していく
嫉妬や妬みから発展	同性の友人または恋愛に関わる異性の取り合いや、大人びていたりする児童生徒、自分と同じ物を持っている児童生徒等に対する妬みを表出する

「遊びから発展」、「誤解から発展」、「喧嘩から発展」は、良好な関係を築くための積極的かつ建設的な行動ができずに、いつの間にかいじめに発展しているものと考えられます。

「謝る」「聞く」「許す」ことに繋がる「コミュニケーション能力」の向上が求められます。

「被害児童生徒の特性」は “いじりーいじられ” の関係性の中でからかったり、被害児童生徒を仲間はずれにしたりする中で、いじめに発展していくものと考えられます。前者

「いじめ未然防止プログラム」について

の加害児童生徒は遊びや親しみの表現であると認識していることもあり、親しさの中にある「思いやり」の醸成が求められます。また後者に関しては、違いを認め、受容し合える「他者理解」や「道徳性」の向上が求められます。

「迷惑感」や「嫉妬や妬みから発展」は、共に被害児童生徒に対する嫌悪感が元になっています。「迷惑感」には加害児童生徒の正義感による被害児童生徒への注意を意図したものや、積極的な迷惑回避が被害児童生徒には無視されたと感じられたものなども含まれます。ただ、この場合においても、自分の思いや考えが相手に正しく伝わっておらず、いじめであるか否かに関わらず、間違った表現方法によるトラブルであることに違いはありません。「思いや考えの表現力」や「コミュニケーション能力」の向上が求められます。

(ウ) いじめの態様

いじめの態様として、以下の３種にまとめられました（表３）。

表３ いじめの態様

項 目		内 容
い 直 じ 接 め 的	身体的	殴る、蹴るなどの暴力。「肩パン」等の遊びの様子を呈しているものもある
	言語的	悪口を言ったり、嫌がるあだ名で呼んだりする
	その他	にらみつけたり、所有物の隠ぺい・破壊などを行う
関係性いじめ		陰口を言ったり、無視をしたりする

暴力などの「身体的いじめ」は、遊びやからかいの延長から生じるものが多く、いわゆる“いじり”から発展する場合があります。無視や陰口などの「関係性いじめ」には、グループに関わるいじめが関係していることが多いと考えられます。小・中学校ではグループ内によるいじめが多く、被害児童生徒が固定せず、グループ内で入れ替わっていくこともあるという特徴があります。また、高等学校では、グループ間に大まかな序列があり、上位グループが気に入らない生徒に対しては、下位グループも一緒になっていじめる傾向にあります。これは、いじめに同調しないと自分がいじめ対象になるかもしれないという恐れを、いじめの構造の中にいる児童生徒が感じていることが原因だと考えられます。

また、多くのいじめに共通して見られる特徴として、スマートフォンなどのインターネット機器の利用があります。グループチャットでの仲間はずし、ブログや掲示板への誹謗中傷の書き込み、相手のブログを使用できなくさせるなどの嫌がらせなどがあります。また、ネット上のいじめとは言えない場合も、ネット上の出来事がトラブルのきっかけとなっていたり、いじめにメールやグループチャット等が利用されていたりすることもあり、いじめの多くにインターネット機器が利用されている現状があります。

(2) いじめを未然に防止するために

ア 教師が行うべきこと

要 点

- 児童生徒同士の心のつながりを育む取組を意図的・計画的に行うことが必要
- 普段から児童生徒と密接に関わり、児童生徒理解に努め、児童生徒の立場に立って気持ちを受け止めることが必要
- 普段から、教師同士及び教師と保護者との密な情報交換が必要
- カウンセリングマインドを生かした生徒指導が必要

(7) 居心地のよい学級づくり

いじめを未然に防止するためには、児童生徒にとって居心地のよい学級づくりを進める必要があります。そのためには、以下の3つの“つながり”を深める取組を積極的に行わなければなりません。いじめはなくならないという見方もありますが、教師の取組によってなくせるいじめはあります。また、知らず知らずのうちに、教師がいじめの原因をつくってしまっていたり、いじめに荷担してしまっていたりすることもあります。まずは、教師自身が人権感覚を高め、いじめをなくすという強い意志を持って様々な取組を積極的に行うことが大切です。

a 「児童生徒」間のつながり

いじめのほとんどは教師や保護者といった大人のいないところで行われます。そこで、教師が休み時間に校内の見守りを行うなど、教師の死角となる場所や時間を減らす取組が行われていますが、見守りには限界があるのも事実です。

児童生徒支援には、教師が個別に対応する支援だけでなく、児童生徒同士で支え合う関係をつくる支援や、児童生徒一人ひとりの心を育む支援があります。すべてを教師が受け止めようとするのではなく、児童生徒自身あるいは児童生徒同士で問題を解決する力を育てるとともに、いじめを「しない」「させない」「許さない」学級づくりに努めていくことが、いじめの未然防止には欠かせません。児童生徒自身の資質・能力や、児童生徒同士の心のつながりを育む取組を意図的・計画的に行うことが必要です。

b 「児童生徒」と「教師」のつながり

児童生徒に信頼される教師になることは、いじめ未然防止の観点からも大切です。信頼している教師からの温かな見守りがあってこそ、児童生徒は、学校が安全かつ安心できる場であることを実感でき、落ち着いて生活することができます。落ち着いた生活は居心地のよい学級の基盤であり、居心地の良さはいじめを未然に防止します。

いじめが起こってしまったとき、信頼できる教師でなければ、観衆や傍観者はもとより、被害児童生徒も教師に相談することはないでしょう。また、加害児童生徒に対して指導を

「いじめ未然防止プログラム」について

行う際も、信頼されていなければ教師の本意は伝わりません。

信頼されるためには、普段から児童生徒と密接に関わり、児童生徒理解に努め、児童生徒の立場に立って気持ちを受け止める指導を継続することが必要です。

c 「教師」と「教師」及び「保護者」のつながり

表4は、上記の聞き取り調査で得られたいじめの予兆です。加害児童生徒、被害児童生徒だけでなく、集団の雰囲気など、様々なところに予兆が見られます。これらの予兆を教師が敏感に感じ取ることが大切であるのは言うまでもありませんが、一人の教師が得られる情報量では不十分です。そこで必要なのは、教師同士の密な情報交換です。各種会議等はもちろんですが、「〇〇さんの様子が最近少し気になるんだけど…」というような普段の会話の中での情報共有が予兆の早期発見には欠かせません。

また、連絡帳や電話、家庭訪問などで普段から保護者と情報共有し、学校と家庭が一体となって児童生徒を共に見守り、育んでいく体制を整えておくことも必要です。

表4 いじめの予兆

項 目	内 容
加害者の変化	・ 特定の児童生徒が発表したとき等に笑ったり、目配せしたりする ・ ストレスフルな様子が見られる
被害者の変化	・ いつもと違う仲間といたり、一人で過ごしたりしている ・ 元気がない、反抗的など、様子がいつもと違う ・ 教師へいつも以上に接触を求めてくる ・ 部活動や登校日など、出席と関係ない部分で欠席をする
雰囲気の変化	・ 教師が現れたときなどに、「なんとなくおかしい雰囲気」を感じる ・ 言葉遣い、靴のかかとを踏んでいるなど、生活の乱れが見られる ・ 「いじり - いじられ」など役割が固定化されてきている

(イ) カウンセリングマインドに基づいた関わり

児童生徒との信頼関係を築いたり、保護者との協同体制を構築したりするには、カウンセリングマインドを生かした関わりが効果的です。カウンセリングマインドとは、カウンセリングの理論や技法を活用することであり、受容や共感という姿勢がその基盤となっています。話し手の考えや気持ちを受容し、正確に共感する姿勢は、話し手の安心感を育みます。話し手が安心できる場を聞き手が意図的に作ることによって、話し手は聞き手に信頼感を抱き、自分の素直な思いを語ることができるようになります。そして、思いや考えを素直に顧みたり、事実を冷静に見つめ直したりすることができるようになります。児童生徒や保護者と話す際に安心の場を提供できる技能は、つながりを育むためにとても役に立ちます。

ただ、カウンセリングマインドは、良いことも悪いことも含めて相手の言動のすべてを肯定したり、甘やかしたりする姿勢であるという誤解もよく聞かれます。学校は教育の場である以上、児童生徒の間違いを指摘して正しい行動を指導しなければなりません。児童生徒の健全育成を目指すからこそ、保護者に対しても言うべきことは毅然と伝えなければ

「いじめ未然防止プログラム」について

いけません。カウンセリングマインドの理論でも、このような姿勢は大切にされます。ただ、そんな指導や事実伝達をする前に、相手との信頼関係を築き、相手にとっての安心の場を提供できなければ、指導する教師の意図は児童生徒に伝わりません。そこで、まずは、受容・共感によって安心の場を作りだそうということなのです。

そのためには、県立教育研修所の研修講座等を利用し、カウンセリングマインドの正しい知識や感覚を身につけたり、「傾聴技法」などのカウンセリング技法を習得したりすることが役立ちます。

「いじめ未然防止プログラム」について

イ 児童生徒に育みたいこと

要 点

- 児童生徒自らいじめを未然に防止するための資質・能力を育む必要がある
- 資質・能力を育む授業は実感を伴うものであることが大切
- 資質・能力を育む授業で得た知識・技能を活用する場面を設けることが効果的
- 教師からの働きかけと、児童生徒の主体的な取組との融合が望ましい

(7) 育みたい 11 の資質・能力

いじめの多くは教師の見えないところで行われているため、児童生徒自身や児童生徒同士でいじめを未然に防ぐ力を育むことが大切です。聞き取り調査の分析から、いじめ未然防止に資するものとして以下の 11 の資質・能力が得られました（表 5）。

表 5 児童生徒に育みたい資質・能力

資質・能力	育むための取組
① ストレスマネジメント能力	・ 自己のストレスに関する知識や正しい対処法を身につける取組
② セルフコントロール能力	・ 怒りや悲しみ等の感情による行動を自らが正しくコントロールできる力を身につける取組
③ 自尊感情・自己効力感	・ 自己の存在を大切なものであると認識し、集団の中で自分の力や存在が活かされると感じさせる取組
④ 思いやり・他者理解	・ 自分との違いを認め、尊重しながら、思いやりを持って接することができる能力を育む取組
⑤ コミュニケーション能力	・ お互いが気持ちよく過ごせるコミュニケーションの在り方を身につける取組
⑥ 思いや考えの表現力	・ 自分の考えや気持ちを正しく表現できる力を育む取組
⑦ 仲間づくり・絆づくりに資する力	・ 仲間と共に楽しむ経験を通じて、集団の絆を育む取組 (年度当初や行事前などに行うと効果的)
⑧ 自治集団づくりに資する力	・ 子どもたちが自らの力で思考・判断・行動ができる能力を育む取組
⑨ 規律性	・ 集団生活のルールを守る集団づくり ・ 法律の学習などを通じて、「いじめは絶対に許されない」という気持ちと行動を育むための取組
⑩ 道徳性	・ 道徳性の向上に係る取組 (クラス開きの際に行うと効果的)
⑪ 相談・支援を求める力	・ 悩みを相談したり、自分一人では解決できないことを支援してもらったりする行動を、自ら進んでできる力を育む取組

自分を大切にできる力となる①ストレスマネジメント能力、②セルフコントロール能力、③自尊感情・自己効力感、他者と良好な関係を築く力となる④思いやり・他者理解、⑤コミュニケーション能力、⑥思いや考えの表現力、集団での生活を豊かにする態度に関わる⑦仲間づくり・絆づくりに資する力、⑧自治集団づくりに資する力、⑨規律性、⑩道徳性、⑪相談・支援を求める力、これらの力や態度を生み出す資質・能力を、学校や児童生徒の実態に合わせてバランス良く身につける取組が必要です（図 1）。

これらの資質・能力を育むことを目的とした授業によって、知識を教えたり、考えさせたり、話し合わせたりして、知識としての理解だけでなく、実感を伴った習得を促すことが重要です。例えばコミュニケーション能力を育む「様々な自己表現を知ろう」の授業では、ロールプレイによって生徒に「攻撃的」「主張的」「非主張的」の 3 つの言い方を体験させ、気持ちの違いを実際に感じさせることによって習得を促します。

「いじめ未然防止プログラム」について

しかし、授業を行っただけでは、身につけたい資質・能力の習得はできても活用に至るまで応用できません。資質・能力に係る知識や技能が習得されていても普段の生活の場で活用されなければ、いじめ未然防止に役立つことはありません。活用のためには、授業で得た知識や技能を、学校生活の中で活用する場面を意図的・計画的に設けるなど、習得と活用を一体化した取組が必要です。

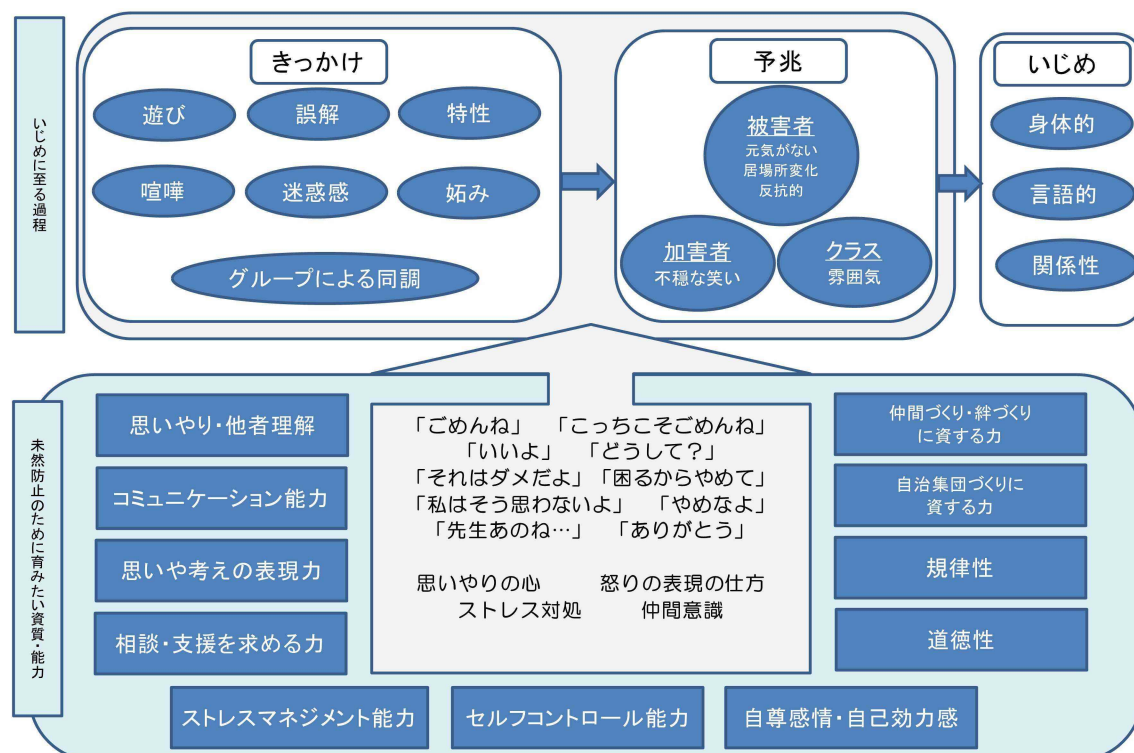


図1 いじめに至る過程と未然防止

(イ) いじめを決して許さない集団づくり

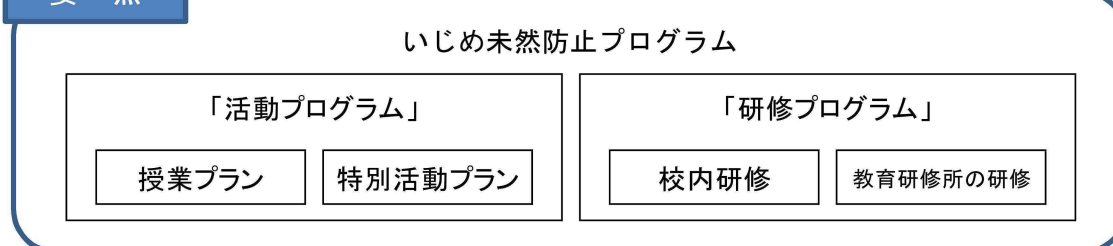
いじめを決して許さない集団を作り出すためには、児童生徒の主体的な取組が不可欠です。例えば、児童会や生徒会においていじめ未然防止に係る取組を企画及び実施することによって、児童生徒が自らの問題として主体的にいじめに向き合うことが期待できます。また、授業で学んだ11の資質・能力を活用できる行事等を、児童生徒が運営することによって、教師による授業と児童生徒による取組が繋がり、主体的に11の資質・能力を体得することができます。それらの充実のためには、児童生徒にいつ、何を、どのように、どこまでやらせるのか、それをどう学校全体の取組に融合させていくのかなど、事前に十分な議論と緻密な計画を行う必要があります。

この「いじめ未然防止プログラム」には、11の資質・能力を取り扱う「授業プラン」だけでなく、「授業プラン」の活用例となる「特別活動プラン」も掲載されています。児童生徒が主体的にいじめ未然防止に取り組む集団となるために、学校の実態に合わせて利用してください。

(3) 「いじめ未然防止プログラム」の利用にあたって

ア 利用の仕方

要 点



(7) 「いじめ未然防止プログラム」の構成

「いじめ未然防止プログラム」は「活動プログラム」と「研修プログラム」の2つから構成されています。

「活動プログラム」は「授業プラン」と「特別活動プラン」から成り、児童生徒に対して行う授業内容や学校全体の取組についてまとめています。

「研修プログラム」は「校内研修」と「教育研修所の研修」から成り、いじめ未然防止のために必要な知識や技能を、教員が習得するための研修を設定しています。第4章にこれらの研修内容等についてまとめています。

(イ) 授業プラン

授業プランは、11の資質・能力の向上を目的とした授業案です（表6）。より良い人間関係づくりに児童生徒が主体的に働きかける態度を育成することを目的としています。

向上が期待できる資質・能力別、発達段階別に授業が構成されています。クラスや児童生徒の状況に応じて、必要だと思われる資質・能力等によって選択、利用してください。また、示されている対象学年はあくまで目安ですので、発達段階に応じた工夫をすれば、他校種や他学年の授業案も利用できます。

(ウ) 特別活動プランの利用

特別活動プランは、授業プランによる授業や、行事、児童会や生徒会における活動等を相互に関連づけ、総合的な取組として実施するものです。学校やクラスの状況に応じて取組例をまとめています（表7）。

いじめを未然に防止するために重要な「クラス開き」、いじめが表面化しやすい「宿泊行事」や「学校行事」の他、「雰囲気が良くない」と感じたときの取組例を校種別に掲載しています。また、年間計画時に参考となる「特色ある取組」も併せて掲載しています。状況に合わせて利用してください。

「いじめ未然防止プログラム」について

表6 授業プラン一覧（育みたい資質・能力による選択）

校種	小学校			中学校			高等学校	特別支援学校
	低学年	中学年	高学年	1年生	2年生	3年生		
育 み た い 資 質 ・ 能 力	ストレス マネジメント 能力	「10秒呼吸法を 使ったストレス マネジメント」	「ご機嫌に過 ぎすための工夫」	「ストレスマネ ジメント」		「自分の感情を 理解する」	「暴力について 考える1」	
	セルフ コントロール 能力	「おおらかな心 をもとう」	「頭にきたとき のより良い対 応」		「怒りのメカニ ズムを理解す る」		「体の感じを言 葉にしてみよ う」	これは、なんで しょう
	自尊感情・ 自己効力感	「自分の木」	「大切なから だ」		「私は私が好き です。なぜなら …」		「役割交換てが み」	買い物に行こう
	思いやり・ 他者理解		「私の大切な仲 間へ」	「友だちの良 いところ探し」	「あったか言 葉」		「暴力について 考える2」	「新入生歓迎会 を成功させよ う」
	コミュニケー ション能力	「うまく仲間 に入ろう」		「目指せ！ほっ こりクラス！」		「ダイヤモンド・ランキン グ」	「紙上での傾 聴・共感体験」	
	思いや考え の表現力			「適切な表現方 法」		様々な自己表現 を知ろう	「絵による自他 紹介」	
	仲間づくり・ 絆づくりに 資する力	(グループワーク等による仲間づくり)						
	自治集団 づくりに 資する力					「マナーブック づくり」	「自分らしさと その人らしさ」	運動会を盛り上 げよう
	規律性			「オリジナル ボールゲームを 発明しよう」				バスに乗ろう
	道徳性							
	相談・支援を 求める力	「わたしのまわ りには…」	「自らの課題や 問題を解決す る」					

※この一覧表は平成27年3月現在のものです。今後更新していく予定です。

表7 特別活動プラン一覧（状況による選択）

状況	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
クラス開き			入学時の集団づく りとトラブル防止	集団活動を柱とし た活動プラン
宿泊行事		宿泊行事を柱とし た活動プラン		
学校行事		文化的行事を柱とし た活動プラン	生徒会活動を柱とし た活動プラン	運動会を柱とした活動 プラン
雰囲気が良くない	学級会を柱とした 活動プラン			
特色ある取組	異学年交流を柱とし た活動プラン		ボランティア活動 を柱とした活動プラン	校外活動を柱とし た活動プラン

※この一覧表は平成27年3月現在のものです。今後更新していく予定です。

「いじめ未然防止プログラム」について

イ 利用上の留意点

「授業プラン」や「特別活動プラン」の一覧表のプラン名称をクリックすると、プラン内容を見ることができます。利用方法は、学校において11の資質・能力の中から、自校の児童生徒に育む必要があると考えられる資質・能力を検討し、その結果を基に「授業プラン」から選択して実施したり、また、クラスの実態や時期に合わせて「特別活動プラン」を選択して実施したりするなど、学校の実情に合わせて利用してください（図2）。

また、プランをそのまま用いるだけでなく、学校の現状に合わせたアレンジを加えて実施することで、より現状に即した形で実施することができ、大きな効果が期待できます。

各プランを実施する前に、学校やクラス、児童生徒の実態を十分にアセスメントした上で、意図的・計画的に活用してください。

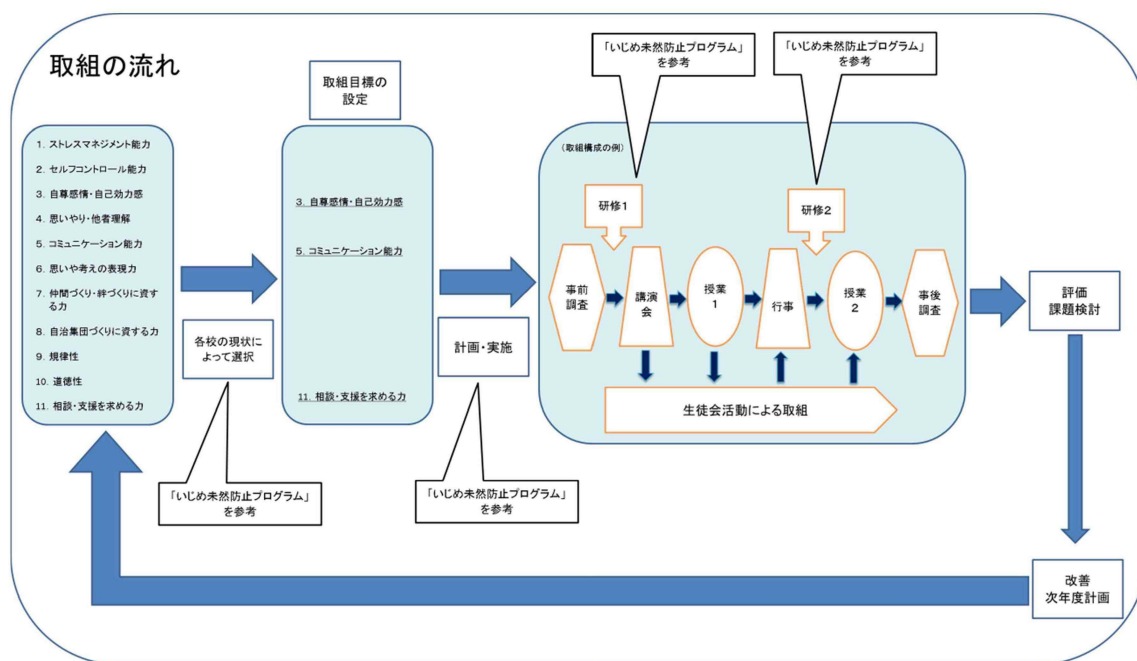


図2 利用方法の例

第 2 章

授業プラン

いじめ未然防止プログラム「授業プラン」一覧表

令和3年4月現在

校種		小学校			中学校			高等学校	特別支援学校
学年	低学年	中学年	高学年	1年生	2年生	3年生			
育みたい資質・能力	ストレスマネジメント能力	「からだところのべんきょう」	「10秒呼吸法を使ったストレスマネジメント」	「ご機嫌に過ごすための工夫」	「ストレスマネジメント」	「自分の感情を理解する」	「暴力について考える1」	「ストレスってなんだろう」	
	セルフコントロール能力	「こんなときどうする？」	「おおらかな心をもとう」	「頭にきたときのより良い対応」	「怒りのメカニズムを理解する」	「考え方のクセを考えてみよう」	「体の感じを言葉にしてみよう」	「これは、なんでしょう」	
	自尊感情・自己効力感	「自分の木」	「大切なからだ」	「私ってどんな人？」	「私は私が好きです。なぜなら…」	「10年後の未来日記」	「役割交換てがみ」	「買い物に行こう」	
	思いやり・他者理解	「あいてのきもちをかんがえよう」	「私の大切な仲間へ」	「友だちの良いところ探し」	「あったか言葉」	「ネットによるいじめを防止しよう」	「暴力について考える2」	「新入生歓迎会を成功させよう」	
	コミュニケーション能力	「うまく仲間に入ろう」	「ひょっとしてコピーング」	「文字と言葉のちがいがい」	「目指せ！ほっこりクラス！」	「ダイヤモンド・ランキング」	「紙上での傾聴・共感体験」	「こんなときどうするの？」	
	思いや考えの表現力	「いっしょに遊ぼう」	「おねがい」	「適切な表現方法」	「上手に断ろう」	「様々な自己表現を知ろう」	「絵による自己紹介」	「うまく伝える方法」	
	仲間づくり・絆づくりに資する力	(グループワーク等による仲間づくり)							
	自治集団づくりに資する力	「みんなで挑戦！」	「カラーコピー大作戦」	「思いを形に！自分たちの目標」	「休日はどう過ごす？」	「マナーブックづくり」	「自分らしさとその人らしさ」	「運動会を盛り上げよう」	
	規律性	「みんなのきもち」	「あだな」	「もしもの世界は良い世界？」	「オリジナルボールゲームを発明しよう」	「立場を替えて感じてみよう」	「救える自分になろう」	「バスに乗ろう」	
	道徳性								
相談・支援を求める力	「わたしのまわりには…」	「ねえ聞いて」	「自らの課題や問題を解決する」	「安心して相談し合える仲間になろう」	「気持ちだけ聞いて」	「あなたに聴いて欲しい」	「助けてもらおう」		

この一覧表は令和3年4月現在のものです。

ストレスってなんだろう

○目標となる資質

ストレスマネジメント能力、セルフコントロール能力、コミュニケーション能力

○指導のねらい

ストレスについて体験的に学ぶとともに、自分のストレスに目を向けて、自らストレスに適切に対処しようとする態度を育む

○準備するもの

ワークシート×生徒数、(風船、バケツ×2、水、イラストカード、白紙など)

○教育課程、実施時期

自立活動、総合的な学習の時間

○留意点など

発達の状態や程度に応じて、身体活動等を取り入れるようにする

展開例		学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1	ストレスについて知る	・ストレスがかかる様子について、風船を使って実演し、外部から圧力がかかる様子を具体的に表現する
展開 40分	2	ストレス状態を知る ・心理面、身体面、行動面での変化について考え、言葉などで表す	・顔の表情や体の様子を、イラストや動作等を交えて考えさせる ・気持ちの重さを、バケツを二つ（水入り・水無し）を持たせるなどして違いを感じ取らせる
	3	どんな時にストレスを感じるかを考える	・具体的な場面を想起させる
	ストレスとうまく付き合おう		
	4	ワークシート等を用いて、今の自分の気持ちを考える	・ストレスは誰にでもあることを知らせる
	5	ストレスを解消するための方法（言葉や行動等）を考える	・発表のあったもののうち、実際にできることを体験させる
	6	体のリラックス体験（肩上げ）をする	・教師が見本を見せ、肩だけを上げ下ろしできるように支援する
まとめ 5分	7	自分の気持ちに目を向けて、ストレスから回復する自分をイメージさせる	・肩を下した時の気持ちを言葉などで表現させ、いつでもどこでもできることを伝える

参考

本授業案は、知的障害特別支援学校（高等部）での実施を想定しているが、実態に合わせてアレンジして実施する。また、ワークシートも3種類用意しているが、実態に合わせていずれかを選択し、適宜修正を施して利用する。

○「ストレスについて知る」について

ストレスは外からの圧力によって心身に影響を与える現象であることを、膨らませた風船を指で押さえることで視覚的に分かりやすく伝える。また風船は押さえても指を離すと元に戻るため、ストレスを受けても回復することができることについても発見させる。ただし、風船がこすれる音を嫌ったり風船が割れるかどうかと気になったりして授業に集中できない生徒がいる場合は、他のものに変えて指導するとよい（例えば、空気を八分目ほど入れて結んだビニル袋や、水を入れて結んだビニル袋など）。

○「ストレス状態を知る」について

ストレスを受けると、心理面・身体面・行動面にどんな変化が起こるかを考えさせる。下記の例のような意見が出てくるようにするとよいが、その際、実態に応じて、ストレスを受けた時の様子を描いたイラストなどを用意して選ばせたり（理解の程度に応じて二者択一にしてもよい）、動作で表現させたりといった工夫をすること。例えば、実際に水を入れたバケツとそうでないバケツを用意して、生徒に持たせて比較させてみることで、どちらがストレスがかかった時の気持ちに近い状態であるかを考えさせるなど、できるだけ体験をとおした実感が得られるようにするとよい。

例 心理面：イライラ、不安、意欲の低下

身体面：頭痛、肩こり、腹痛、下痢・便秘

行動面：ミスやけがの増加、暴飲暴食 など

○「どんな時にストレスを感じるかを考える」について

ストレスを感じる時はどんな時だと思いかを発表させたり、イラストカード（怒られた時、悔しかった時など）を選択させたりして、具体的な場面として振り返らせることで、ストレスの原因となる出来事（ストレッサー）を明らかにしていく。そして、①ストレス自体は有害なものではなく、頑張ろうとするエネルギー源にもなること、②ストレスは誰もが感じるものであること、③ストレスをなくそうとすることではなく、うまく付き合っていこうとすることが大切であることを伝える。

○「今の自分を振り返る」について

自分のストレスに目を向けさせるために、ワークシート等を用いて、今の自分の気持ち（気分の良さ）を表現させる。実態によっては「最近ストレスを感じた出来事」を想起させ、その時の気持ちの様子を表現させてもよい。その後、生徒のストレスの対処法を発表させ、様々な対処法があつていいことを伝える。

○「体のリラックス体験をする」について

授業案では「肩上げ」を実施するようになっているが、実態に即したリラックス法を選択するとよい。まず、肩がどこであるかを、ペアで手を置き合うなどして確認させる。肩を上げる際は肩だけに力を入れるよう伝え、できていない生徒には教師が手を添えて上げていくなどの支援を行うようにする。次に、「すとーん」という合図とともに肩の力を抜かせ、その後の体の感じを味わわせる。ゆったりと椅子に腰かけた姿勢で行うことでより効果的となる。具体的な方法は、いじめ未然防止プログラム中学校授業プラン「ストレスマネジメント」を参照するとよい。

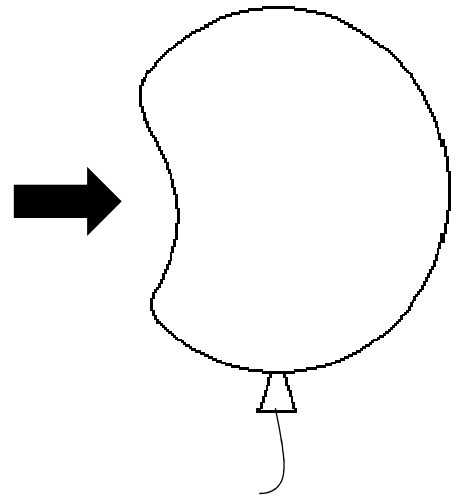
資料

参考文献 厚生労働省「こころの耳」<https://kokoro.mhlw.go.jp/>

1 ストレスとは・・・

- ・ からの によって、
 に えいきょう 影 響 あた を与える げんしょう 現象。

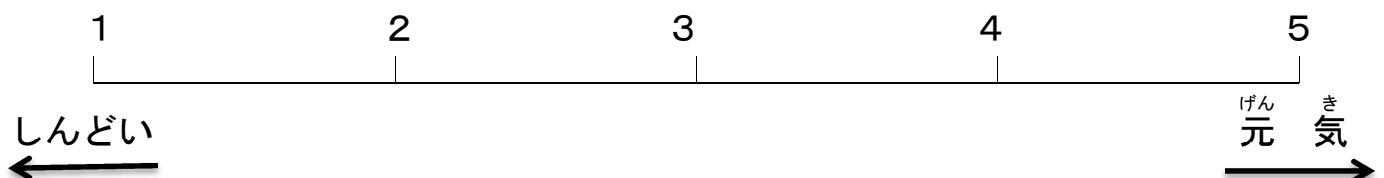
イメージ図



2 ストレスを受けると、からだ 体 や こころ 心 に、どんな へんか 変化 が起こるか、かんが 考 えよう。

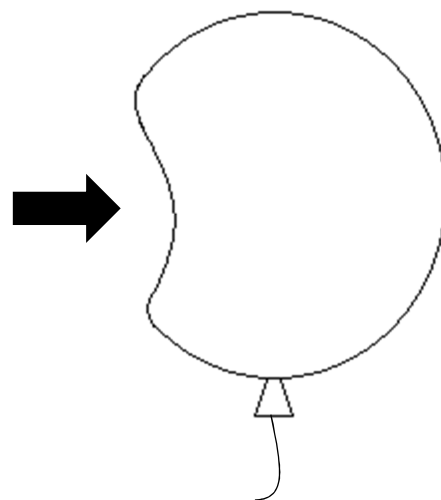
3 どの とき 時に、ストレスを感じるかな？

4 今の自分の気持ちは、どんな じょうたい 状 態 かな？ した 下 の 1～5 の すうじ 数字 1 つに○をつけよう。



1 ストレスとは・・・

イメージ図



2 ^{す と れ す} ストレスをうけると、どうなるかな？

3 ^{す と れ す} どんなときに、ストレスをかんじるかな？

4 いまの、じぶんの きもちを、えらんでみよう。



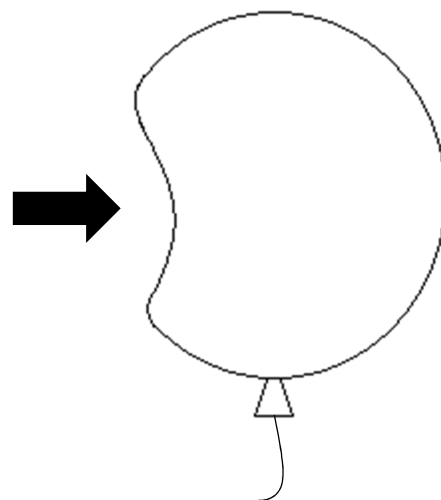
しんどい
←

げんき
→

2 ストレスとは・・・

- ・ からのによって、
に 影響を与える現象。

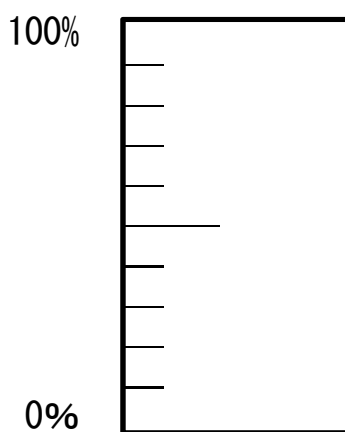
イメージ図



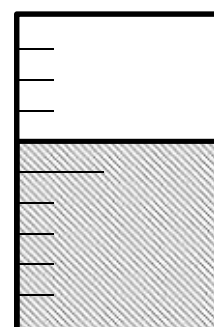
2 ストレスを受けると、身体や心、行動に、どんな変化が起こるか、考えましょう。

3 どんな時に、ストレスを感じるか、具体的な場面を思い浮かべてみましょう。

4 今の自分の気分は、どんな状態でしょう。元気な時を 100%として、表現しよう。



(例)



今の気分は60%

これは、为什么呢

○目標となる資質・能力

セルフコントロール能力、思いや考えの表現力、仲間づくり・絆づくりに資する力

○指導のねらい

- ・考えを自分のことばで相手に伝えることができる
- ・目標物を注視する

○準備するもの

衝立1組、ぬいぐるみ（牛、黒ウサギ）、シルエットクイズ用影絵カード（ボール）

○教育課程、実施時期

自立活動、年度初め以外（学級内の関わりができ、互いに話せるようになってから）

○留意点など

展開例		学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1	本時の活動を知る	・クイズを行うことを伝え、意欲を高めるとともに、多くの考えを発表するように促す
		これは、为什么呢	
展開 35分	2	クイズ「だれがとおったでしょう」 衝立の間を通り過ぎた動物が何かを考える ① うし ② 黒ウサギ 発表例「うしです。白と黒の模様があったからです」	(クイズの説明をする) ・衝立の間にある動物が通る ・一瞬なので、まばたきせずに見る ・答えだけでなく、理由も発表させる
	3	シルエットクイズ ① ボール ※シルエットクイズは生徒1名が出題となる ヒント例「動物ではありません」	(クイズの説明をする) ・影だけを見て答えを考える ・答えだけでなく、理由も発表させる ・出題者の生徒には、ヒントを自分で考えて、答えに導くようにさせる
まとめ 10分	4	感想を発表する	・活動で感じた思いをそのまま発表するように促す

◎中学部（知的障害、肢体不自由）での実施

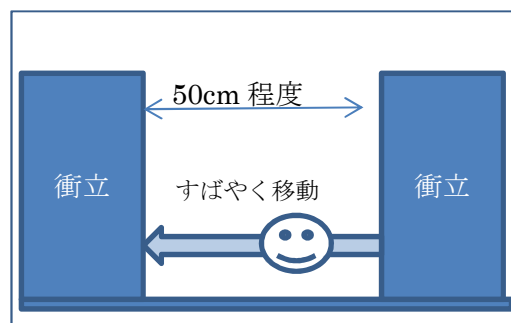
ゲームや遊びを通して、意見を発表したり、聞いたりして互いのことを意識する。同じ思いを持つことで仲良くなったり、違う意見を聞いて興味を持ったりすることもある。クラス内の友達関係作りの際に活用する。

○クイズ「だれがとおったでしょう」について

<方法>

- ① 生徒から見える幅を 50cm 程度にし、その両側に衝立を立てる。
- ② 生徒から見て、右側から左側へ向かって、すばやく動物のぬいぐるみを移動させる。

※慣れてきたら、衝立の幅を狭くする、対象物を移動させるスピードを速くするなどして、より注視する意識を高める。



<発表>

答えだと思ふ動物と、なぜそう思うのかを発表させる。その際、生徒が見て得た情報（色、形などの特徴）を自分の言葉で相手に伝わるように、文を組み立てて発表するようにする。一人だけでなく、できるだけ多くの生徒に発表させ、友達の情報と重複する際は、「〇〇さんと同じで、□□が見えたからです」等、発表の仕方も指導する。

○シルエットクイズについて

はじめは、「えんぴつ」、「はさみ」等、形がわかりやすく、生徒が普段からよく使用しているものを対象とする。今回は、いろいろなものを想起させ、生徒の想像力を高めるために、単純な丸い形であるボールを選んだ。生徒から丸いものをたくさん想起させながら、自分の考えを自分の言葉で説明する力を養う。

○出題者を生徒の中から選出することについて

自分の考えを一方的に発表するだけでなく、発達段階に応じて「友達の意見を聞いて考え、自分の意見を伝える」という活動を取り入れていく。今回の活動では、出題者になることで、「正解」と「友達の意見」を照らし合わせて、その相違について自分の考えを伝えることをねらいとする。例えば、ある生徒が「ランチルームのテーブルに似ているから、テーブルだと思います」と答えた場合、「これはランチルームにはありません。運動場で使うものです」などと答えることを期待したものである。

買い物に行こう

○目標となる資質・能力

自尊感情・自己肯定感、相談・支援を求める力

○指導のねらい

- ・自分で欲しいおやつを選び、買うことができる
- ・わからないときに質問することができる

○準備するもの

電卓、計算用ワークシート、おやつ、買い物かご、レジ

○教育課程、実施時期

生活単元学習、校外学習の前など

○留意点など

発達段階に応じて、金額設定を行う

展開例

	学習活動	指導上の留意点
この展開例は 50 分×2 コマ続きで行うことを想定しています		
導入 15 分	1 遠足の流れを知る ・行き先、日時、内容、持ち物 買い物に行こう	・遠足への意欲を高めながら、想像力を高めるようにする
展開 75 分	2 どんなおやつを持って行く？ 決められた予算（500 円）の中で ① 持って行きたいおやつを考える ② おやつを選んで、買えるか確認する 3 買い物に行こう（校内シミュレーション） ① 自分の欲しいおやつを選ぶ ② レジで支払いをする	・できるだけ自分で欲しいおやつを選ばせ、実際に計算しながら予算内に収まるかを考えさせる ・予算内に収まらない場合は、別のものを選ぶように促す ・たくさんのおやつから迷いながら、あれこれ考え、何度もチャレンジできるようにする ・買い物の方法や計算方法などがわからないときは、黙って待つのではなく、自分から声をかけるように促す ・支払いの際、おつりとレシートを受け取ることを忘れないように留意させる
まとめ 10 分	4 感想を発表する	・実際の買い物で個々が留意することをおさえる

◎中学部（知的障害、肢体不自由）での実施

「買い物」学習は、算数の足し算を学習するだけでなく、「自分の欲しいもの」→「自分で選ぶ」→「お金を払う」→「得る」ということを実感する学習である。生活の中で必要な力を養う大切な活動であり、正しく身につけなければならない。他の学習で「お金の大切さ」、「働くこと」などを学びながら、最終的には働く意欲、自己実現へとつなげていく必要がある。

○計算について

実際に買い物に行く前に、数学（算数）で、足し算・引き算を学習する。お金の計算は、おもに2桁（10円、50円等）や3桁（100円、500円等）の足し算が中心であるので、実際の硬貨を用いながら行う。その際、数字の羅列の計算ではなく、その金額で購入できる身近な具体物（ガムや菓子）を活用する方が実際の場面で活用できる学習となる。学習の積み上げから、複数の商品を組み合わせたりしながら、自分の持っているお金で購入できるかなどを引き算で学習し、おつりを意識させていく。

○買い物の方法について

店内でのルールとして、自分のかごを持って商品を入れることや、レジで順番を待つこと、お金の支払い方（指定の場所にお金を出す）、おつりとレシートを受け取ること、購入した商品は指定の場所で買い物袋に入れること、購入後は店内に戻らないことなどを学ばせる。また、マナーとして、陳列してある商品を不必要に触らないことや、陳列棚の前で長く立ち止まらないことなど、他のお客様の迷惑にならないように行動することも伝える。

○実際の買い物学習について

シミュレーションしたことを、スーパー等の店内で実際に行う。実際の場面では、練習では体験しなかったことが起こりうる。目的の商品の場所がわからない等、困ったことがあれば教師に聞くのではなく、店員を見つけて尋ねるように支援する。

○活動の振り返りについて

活動後には、児童が頑張ったことやできるようになったことを自己評価させるとともに、教師が具体的にほめることで自尊感情を高めることにつながる。また、コミュニケーション能力や社会性等を高めるためにも、自分の気持ちや意見を発表させる活動は、できるだけ多くの場面で取り入れていくことが望まれる。

新入生歓迎会を成功させよう

○目標となる資質・能力

思いやり・他者理解、思いや考えの表現力、仲間づくり・絆づくりに資する力、自尊感情・自己効力感

○指導のねらい

新入生歓迎会の立案を通して、自分の意見を人に伝えること、相手の立場に立って考えることを体験し、リーダーとしての意識を持つ

○準備するもの

パソコン、ワークシート×生徒数

○教育課程、実施時期

知的障害（重度重複の生徒を含む）高等部3年生生活単元学習、4月上旬～中旬

○留意点など

本展開例は特別活動プラン「集団活動を柱とした活動プラン」の授業1である。授業2及び授業3の展開例については、参考欄を参照すること

展開例

	学習活動	指導上の留意点
この展開例は50分×2コマ続きで行うことを想定しています		
導入 15分	1 高等部3年生（最高学年）になった思いや決意を発表する 2 本時の学習を知る	・リーダーになることへの思いを高める
	新入生歓迎会を成功させよう	
展開 75分	3 新入生歓迎会のプログラムを考える（予想される案） 「ゲーム」「歌」「会食」「プレゼント」「歓迎のことば」など 4 班分け（役割分担）をする 5 各班に分かれて、活動（プログラム）内容について相談する ・活動の詳細 ・準備物 ・役割分担	・重度の生徒にもできる内容を考慮するように促す ・積極的な生徒だけでなく、全員の意見が出せるようにする ・主体性と適性を考慮する ・重度の生徒にもできる内容を考慮するように促す ・適切な時間配分をするように考えさせる
まとめ 10分	6 決定した活動内容を発表する	・人に伝わるように発表させる ・内容の確認

参考

○高等部段階の特徴について

高等部段階では、卒業後の社会生活への移行期ということで、実際の社会生活「働くこと」を強く意識して進めることになる。自己肯定感、自己有用感を高める、失敗や困難を乗り越える、そして、やりがいを感じられるように指導・支援していく必要がある。就労後、「職場の人とうまくコミュニケーションがとれない」、「仕事がしんどくて耐えられない」という理由から仕事を辞めてしまうケースが少なくない。学校生活の中で、「自分はこれが得意なんだ」、「自分にもできるんだ」という自信を確実なものにしていくこと、「自分は人から必要とされているんだ」と実感することと併せて、「失敗したときに、どのように乗り越えていくか」ということも大切な力であると考え。

○生活単元学習について

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するものである。

○本活動について

本活動は、①後輩のことを考えて内容を計画する「思いやり・他者理解」、②計画を進め、実行するために自分の「思いや考えを表現する力」、③新しい後輩や学部内の友達との絆を深める「仲間づくり・絆づくりに資する力」、そして④自分にもできるという自信を確実なものにしていく「自尊感情・自己効力感」を育成することを目標としている。「新入生歓迎会」を成功させるためには、リーダーである3年生が、個々の生徒のことを考え、みんなが楽しめる内容を計画しなければならない。準備段階では、ゲーム進行のために、相手に伝える話し方等について学習をしたり、会食のための調理の実施、プレゼントの作成をしたりするなど、様々な体験をしながら今後の社会生活に必要な力を身に付けていくことになる。

○特別活動プラン「集団活動を柱とした活動プラン」における展開について

本授業の活動の後、「事前学習」については、各班で活動する中で、リーダーとして活躍することを通して主体性を高めるとともに、班内の生徒と協調することを学習する。また、「事後学習」では新入生歓迎会を終えた後、生徒自身が活動についての感想や反省、自分の役割の振り返りなどの評価を行う。この活動の際、時系列で活動を振り返ったり、感じたことを自分の言葉でまとめ、伝えたりするようにする。

教師は、生徒の卒業後の社会生活を見通し、生徒自身が思いや考えを相手に伝えることの重要性を捉え、様々な活動の中で人前で話したり発表したりする場を設定する必要がある。

資料

- ・特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）
- ・独立行政法人特別支援教育総合研究所「特別支援教育の基礎・基本～一人一人のニーズに応じた教育の推進～」

こんなときどうするの

○目標となる資質

コミュニケーション能力、思いやり・他者理解、セルフコントロール、

○指導のねらい

自己の話し方がどんな気持ちから生まれているのか気づき、場面に応じた友達への返事や、友達の返事に応じた行動ができる。

○準備するもの

場面カード（自分の日常的な行動）、顔カード

○教育課程、実施時期

自立活動、総合的な学習の時間、特別活動

○留意点など

発達の状態や程度に応じて、身体活動等を取り入れる

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 自分の日常的な行動を思い起こさせる こんなとき、どうするの？	・児童の日常のトラブル場面を教師が再現し、課題に気付かせる。
展開 40分	2 場面カードを見て、登場人物のセリフや気持ちを考えて話し合う (1) ボールで遊んでいる場面 (2) AがBにボールを貸す場面 (3) AがBにボールを渡すのを拒否する場面	・顔の表情や動きを、イラストや動作等を交えて考えさせる ・話合いのはじめに話を聞く時の注意点を示した聞き方カードを提示する 【教師用資料1】 ・A、Bという立場の違いに応じたセリフを考えさせるために、それぞれの顔カードをはる ・出てきたセリフをみんなで確認させるために、「話す時、聞く時の約束表」にセリフを書き込む 【教師用資料3】
まとめ 5分	3 本時のまとめをする。	・ボールを貸してもらえる時、貸してもらえない時の話し方や行動の仕方を確認する

参考

本時案は、知的障害特別支援学校（小・中・高等部）を想定している。実態に合わせて変更して実施できる。

○「自分の日常的な行動を思い起こさせる」について

本時では、ボールの貸し借りの場面に応じた返事をしたり、相手の返事に応じた行動をしたりすることができるようになることをねらいとしている。

導入では、物の貸し借りや物のやりもらい等、日常のトラブル場面を教師が再現することで課題に気付かせ、場面に応じた伝え方、行動の仕方を学習することを知らせる。

○「場面カード（自分の日常的な行動）」について【教師用資料2】

貸し借りの場面に応じた話し方や行動の仕方について考えることを知らせるために、まず、(1)場面 『Aがボールで遊んでいる』場面のAの行動や気持ちについて考えさせる。次に、(2)場面 『Bの要求に対して、Aが許可の返事をし、BがAの返事を待ち、お礼を伝える』場面の登場人物のセリフについて考えさせる。そして、(3)場面 『Aが要求に対して拒否し、Bは相手の返事に合わせた行動をする』場面の登場人物のセリフや行動について考えさせる。

登場人物の行動を考えるのが難しい場合には、「Aは何か持っているね。」「何を持っているのかな?」のようにヒントとなる言葉かけを行う。

A及びBの立場の違いに応じたセリフを考えさせるために、AとBの顔カードをホワイトボードに貼るのもよい。2人の男の子がボールを取り合う場面については、登場人物のセリフや気持ちについてペープサートを操作させ、話し手、聞き手の立場の違いに気付かせる方法も考えられる。

○「話し方や行動の仕方を確認」について【教師用資料3】

児童が考えた場面に応じた話し方や行動の仕方を「話す時、聞く時の約束表」に教師がまとめ、本時のまとめとして、話し方や行動の仕方を確認する。

○「ソーシャルスキルトレーニング」について

本単元は自立活動の内容の6つの区分のうち、①「心理的な安定(2)状況の理解と変化への対応に関すること」と、②「人間関係の形成(4)集団への参加の基礎に関すること」と、③「コミュニケーション(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること」を組み合わせ、ソーシャルスキルトレーニングを通して日常生活で必要とされるルールを理解し、場面に応じた適切な行動ができるようになることをねらっている。ソーシャルスキルトレーニングは、「教示」、「モデリング」、「リハーサル」、「フィードバック」、「劇化」という5つの活動から構成されるものである。日常生活に近い場面を設定しソーシャルスキルトレーニングを行うことは、場面に応じた話し方をしたり、相手の返事に応じた行動をしたりする等、伝え合う力を身に付けさせる上で有効である。ソーシャルスキルトレーニングの最後に行う「劇化」は児童生徒にとって興味・関心の高い活動であり、より日常生活に近い場面設定の中で伝え合うことで、学習したことの般化を促すことができると考えられることから、本時案実施後、劇化することがより効果的である。

資料

- ・心の教育授業実践研究第4号：小学校編
- ・福岡教育センター

【教師用資料 1】

1 聞き方カード

あいて
1 相手を

み き
見て聞く



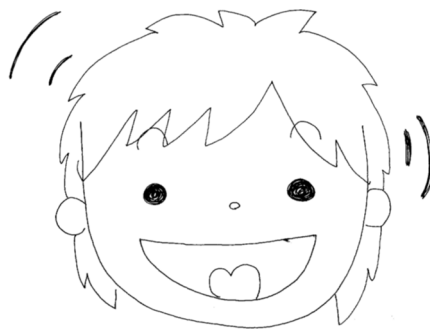
2. だまって

み き
見て聞く



3. そうだと

おも
思ったら
うなづく



4. メモをとる



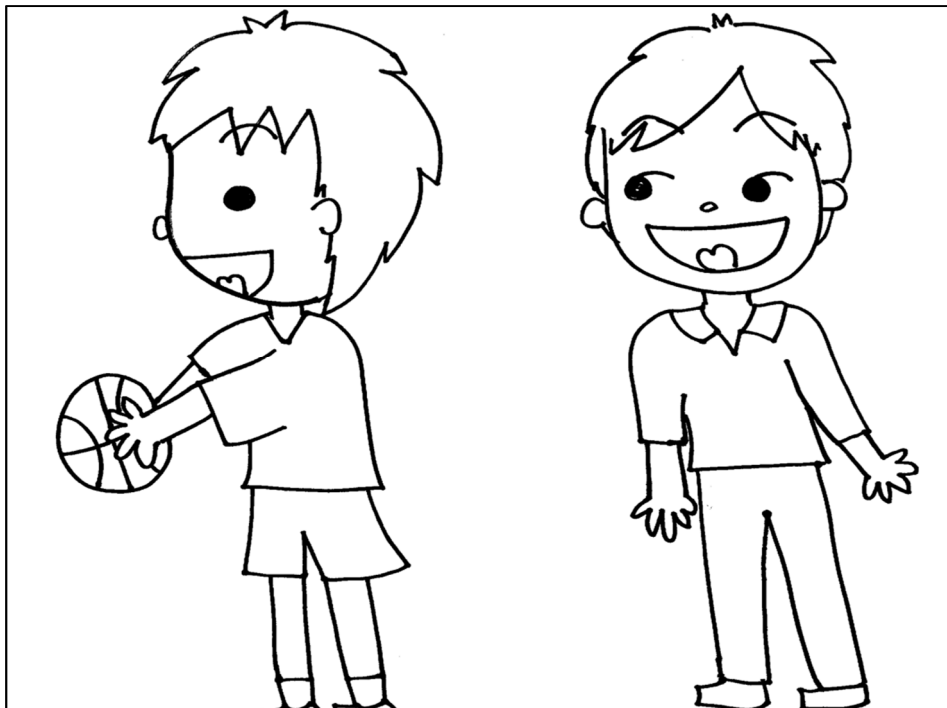
5. わからないときは たしかめる



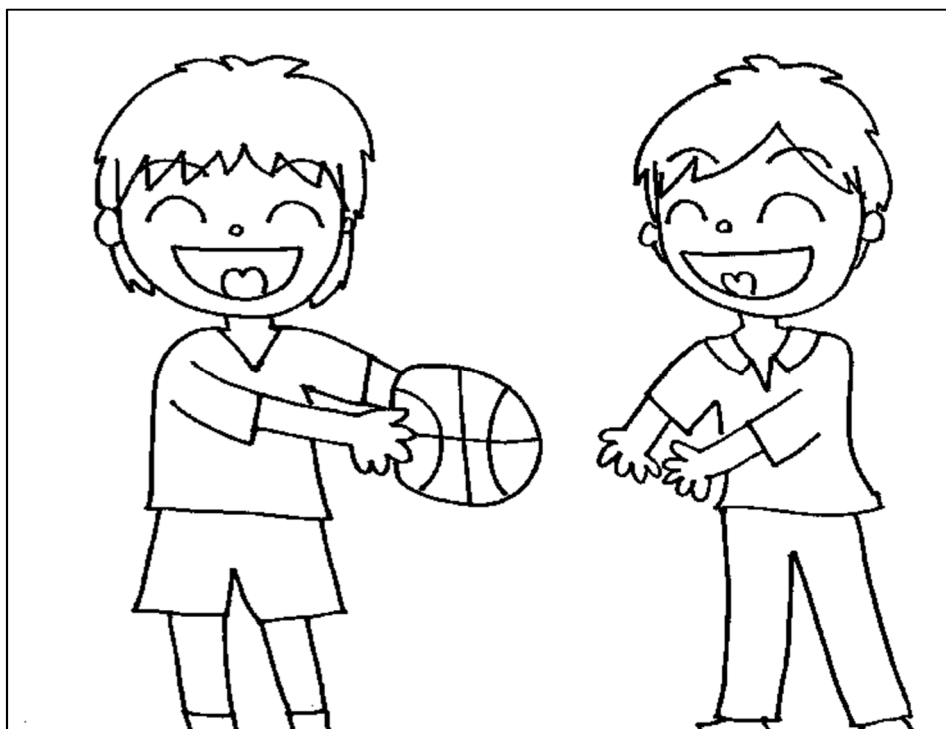
【教師用資料 2】

1 「場面カード（自分の日常的な行動）」

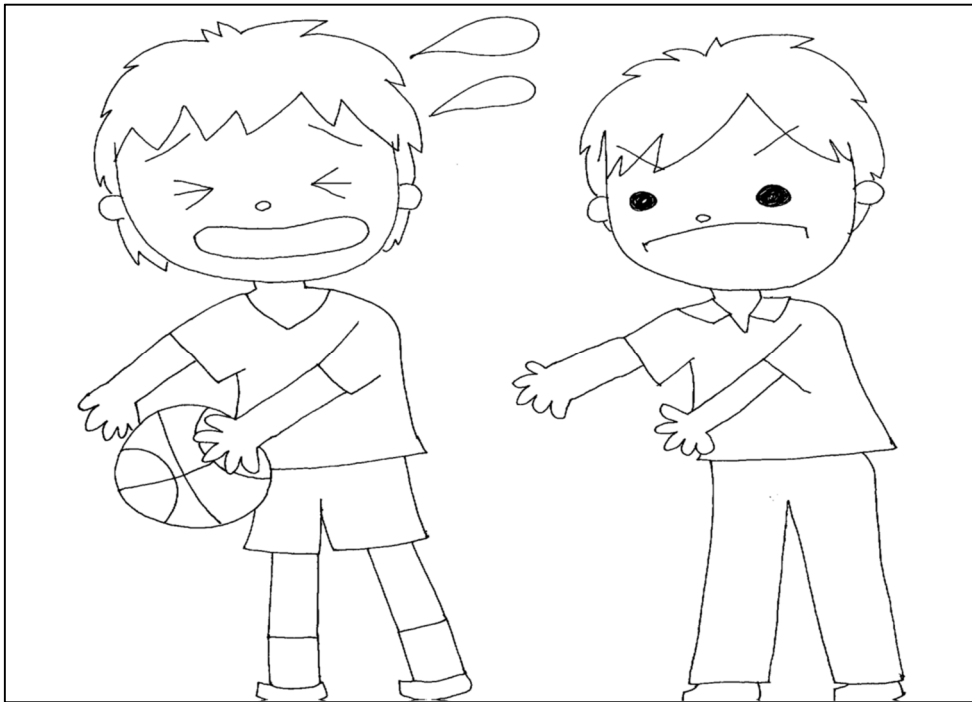
(1) 『Aがボールで遊んでいる』場面



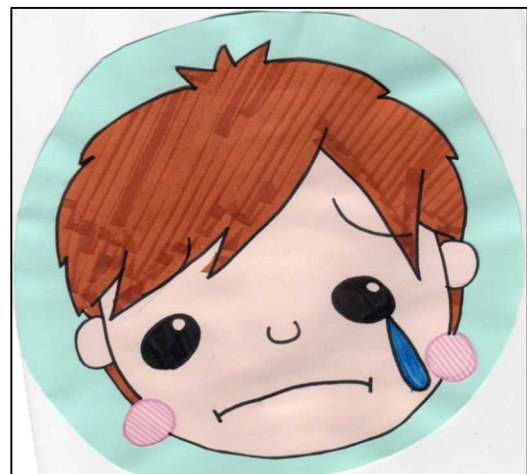
(2) 『Bの要求に対して、Aが許可の返事をし、BがAの返事を待ち、お礼を伝える』場面



(3) 『Aが要求に対して拒否し、Bは相手の返事に合わせた行動をする』場面



2 「顔カード（喜怒哀楽）」



【教師用資料 3】

1 話すとき、聞くときのやくそく （確認しよう！）

【ボールを貸してもらえる場面】

	書き込み例(児童生徒の発表)
1 相手は話できるようすかたしかめて	・にこにこしている (・いそがしそうだから、やめよう)
2 相手へ伝えることは、わかりやすく	・私も遊びたいから、ボール、貸してくれる？
3 相手からの話に対してこたえよう	(・貸してあげる) ・貸してくれてありがとう
4 疑問に思うときはたずねよう	
5 相手の話を、聞くよゆうはあるか	・今は、遊んでいるから後でね

【ボールを貸してもらえない場面】

	書き込み例(児童生徒の発表)
1 相手は話できるようすかたしかめて	・いそがしそうだな、やめよう
2 相手へ伝えることは、わかりやすく	・私も遊びたいから、ボール、貸してくれる？
3 相手からの話に対してこたえよう	(・ごめんね。だめなんだ) ・わかった
4 疑問に思うときはたずねよう	・いつなら、かしてもらえる？
5 相手の話を、聞くよゆうはあるか	

うまく伝える方法

○目標となる資質

思いや考えの表現力、コミュニケーション能力

○指導のねらい

友だちとのやりとりを通して、自分の気持ちや思い、考えを適切に相手に伝える力を育む

○準備するもの

ワークシート×児童生徒数

○教育課程、実施時期

自立活動

○留意点など

発達の状態や程度に応じて、身体表現等を取り入れるようにする

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	1 本時のねらい及び学習内容を知る	・ねらいを板書する
	思ったことや考えたことをうまく伝えよう！	
	2 授業中に居眠りをしている友だちのイラストを見て、声のかけ方を発表する	・声をかけないという選択肢もあってよいとする
展開 30分	3 「これどう思う？①」について考える (1) ワークシートに記入する (2) 記入したことを発表する (3) 友だちと意見交換する (4) 先生からの話	・書くことが苦手な児童生徒には、教員が言語化、代筆などをする ・発表することが苦手な児童生徒には、質問形式にしたり、身振りで表現させたりして抵抗感を減らす
	4 「これどう思う？②」について考える (1) ワークシートに記入する (2) 記入したことを発表する (3) 友だちと意見交換する (4) 先生からの話	・友だちと意見交換するときは、人それぞれの意見があることを伝える ・先生からの話では、学校では、まずは先生に相談するという選択肢もあることを伝える
まとめ 5分	5 本時の学習を振り返り、感想を伝え合う	・感想を伝えることに抵抗がある場合は、教員が言語化、質問形式で支援する

○知的障害のある児童生徒の特徴

知的障害のある児童生徒の場合、自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えられなかったり、相手の意図が理解できなかったりしてコミュニケーションが成立しにくいことがある。そこで、自分の気持ちを表した絵カードを使ったり、簡単なジェスチャーを交えたりするなど、要求を伝える手段を広げるとともに、人とのやりとりや人と協力して遂行するゲームをしたりするなど、認知発達や社会性の育成を促す学習などを通して、自分の意図を伝えたり、相手の意図を理解したりして適切なかかわりができるように指導することが大切である。(特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 平成 30 年 3 月文部科学省 P93)

○発表について

本授業案ではイラストやワークシートの記述を元に発表を行う場面が多くある。そのため、発表にあたっては、人前で緊張しやすく声が出せない児童生徒、考えをまとめて言葉にするのに時間がかかる児童生徒、思いを表す適切な言葉が分からない児童生徒など、様々であることが予想される。児童生徒の実態に応じて、選択肢を用意して選ばせるなど、実態に応じた支援を行うことに留意する。

○導入について

導入では、授業中に居眠りをしている友だちのイラストを見て、私なら何と声をかけるかについて発表させる。まずは、児童生徒にイラストを提示し、教師から授業中であること以外はヒントを与えずに、イラストを見てどのような様子かを問う。導入段階においては、できる限り児童生徒の自発的な発言を大切にし、思ったことや感じたことが自然と出るように、教師は共感的に発言を受け止めるように留意する。発表が一部の児童生徒に偏ったり、イラストの状況が把握しにくい児童生徒がいたりする場合は、実際にその場面を実演させて考えさせる。例えば、具体的な授業中をイメージさせたり、イラストには描かれていないが教師がいることをイメージさせたりすることで、「居眠り」し続けているとどのようなことが起こり得るかを考えさせたい。

○展開「これどう思う?①」について

イラストは、授業中にAさんがBさんをからかい、BさんがAさんに言い返さず我慢をしている様子である。イラストの場面を想起させるために、導入時に行ったような実演を交えて考えさせても良い。本時のねらいが思ったことや考えたことを伝えることを主眼に置いているため、ワークシートへの記入量は必要最低限で作成しているが、児童生徒には、「自分がAさんならどうか」、「自分がBさんならどうか」を発表させるとともに、児童生徒同士で意見が異なる場合には、その理由を尋ねてさらに考えさせるようにする。授業のねらいからも、適切な行動は何かを考えさせるよりは、児童生徒が思ったこと、考えたことについて掘り下げることに重点を置きたい。また、児童生徒自身がAさんに実際に声をかけるとすれば、どのような声かけをするかということも考えさせたい。本授業案のねらいである「思いや考えの表現力」を育むために、自分がBさんの立場だったらどう声をかけるか、あるいはAさんとBさんの様子に気付いた第三者の立場だったらどう声をかけるかという視点でも意見交換してほしい。

○展開「これどう思う?②」について

イラストは、休憩時間（休み時間）における教室での一幕である。Aさんは騒がしい環境に苦手さを感じる特性があり、そのことを周囲の児童生徒には伝えておらず、休憩時間にAさんは耳をふさいだり、教室から出たりして過ごしているという状況を設定しておく。児童生徒には、Aさんはどのような気持ちで過ごしているのか、周囲の児童生徒はAさんのことをどう思っているのか、Aさん、周囲の児童生徒、それぞれの立場で思うことを発表させたい。軽度の知的障害のある児童生徒にとって、しんどさを周囲に伝えることは容易でないことがある。自分がAさんの立場だったら周囲にどう声をかけるか、あるいはAさんの様子に気付いた第三者の立場だったらどう声をかけるかという視点でも意見交換する。この題材を通して、自身が思うことをどのように伝えたら相手に伝わるかを練習する機会にしてほしい。

○まとめ「本時の学習を振り返り、感想を言う」について

軽度の知的障害のある児童生徒に、「今日の授業の感想を言いましょう」と伝えたとき、どのような反応があるだろうか。おそらく、どのような内容を言えばよいか分からず、迷うのではないと思われる。そこで、ワークシートには3種類の枠組みを設け、()に記入するようにした。こうすることで、感想が書きやすくなるのと同時に、その後の感想を伝え合う発表につなげることができる考える。軽度の知的障害のある児童生徒にとって感想を相手に伝えやすくするためには、枠組みを設ける手立てを講じることが有効である。

資料

○「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（平成30年3月）」（文部科学省）

○国立障害者リハビリセンター 発達障害情報・支援センター (<http://www.rehab.go.jp/ddis/>)

※本授業案のワークシート「これどう思う?①②」は上記サイトの「こんなとき、どうする?」サイト上の「ライフステージ別」Q&A「学童期 Q3」「思春期 Q2」のイラスト・事例を利用して作成した

【授業のねらい】思ったことや考えたことをうまく伝えよう!

1 次のイラスト(授業中)を見て問いに答えましょう。

(1) どのようなようすですか?



(2) あなたなら、Aさんにどのように声をかけますか?

_____と声をかけます。

2 「これどう思う?①」次のイラスト(授業中)を見て問いに答えましょう。

(1) どのようなようすですか?

(2) あなたがAさん、Bさんについて思ったことや考えたことは?

Aさん: _____

Bさん: _____



(3) あなたなら、Aさんにどのように声をかけますか?

_____と声をかけます。

3 「これどう思う?②」次のイラスト(休み時間)を見て問いに答えましょう。

(1) どのようなようすですか?

(2) あなたが A さん、まわりの人について思ったことや
考えたことは?

A さん: _____

まわりの人: _____



A さん

(3) あなたなら、A さんにどのように^{こえ}声をかけますか?

_____ ^{こえ}と声をかけます。

(4) あなたが A さんならまわりの人にどのように^{つた}思いを伝えますか?

_____ ^いと言います。

4 今日の^{じゅぎょう}授業の^{かんそう}感想を書きましょう。

私が今日^{べんきょう}勉強したことは、()です。

私が今日^{あた}新しく知ったことは、()です。

^{ほか}他に思ったことは、()です。

私



Aさん







Aさん

運動会を盛り上げよう

○目標となる資質・能力

自治集団づくりに資する力、規律性、道徳性、セルフコントロール能力

○指導のねらい

- ・リーダーとしての意識を高める
- ・見通しを持って考える

○準備するもの

昨年の運動会の写真（または動画）、生徒の顔写真カード、ふせん、模造紙、色画用紙、マジック

○教育課程、実施時期

特別活動、運動会の1～2ヶ月前

○留意点など

展開例		学習活動	指導上の留意点
この展開例は50分×2コマ続きで行うことを想定しています			
導入 20分	1	運動会を想起する 昨年の写真（または動画）を見て、運動会の流れを思い出す	・運動会を目前にし、リーダーとしての役割を考えさせる。
運動会を盛り上げよう			
展開 75分	2	運動会で必要な役割を考える ① 2人ペアで相談し、思いついたものをふせんに書く ② 書いたものを模造紙に貼りながら意見を出し合う ③ 必要、不必要な役割を精選する ④ 人数配分を行う ⑤ 人選を行う（写真カードを活用） 3 各班に分かれて具体的な内容を考える ・具体的な内容を考え、表に記入する 4 具体的な内容と目標を発表する	・2人ペアにすることで積極的に活動させる。 ・「〇〇（ダンス）の時に、〇〇する人（音楽をかける人）が必要だと思います」と活動と役割を言わせる。 ・共通しているもの、生徒の役割ではないものなど考えて、精選していく。 ・必要な人数と誰が適しているのかを考えさせる。 ・各役割班にわかれて、具体的な仕事内容を想起させ、時系列で考えさせる。聞き手に伝わるように、堂々と発表するよう促す
まとめ 5分	5	まとめ	・次時から具体的な準備へ移ることを伝え、リーダーとして主体的に活動するように伝える。

◎高等部（知的障害、肢体不自由）での実施

高等部では様々な活動を通して、リーダーとしての役割を自覚させることを目指す。卒業後の社会生活を見通して、集団の中での自分の役割を考えたり、自分の思いを優先するのではなく周囲の友達を尊重することを考えさせたりする経験を積む。

○話し合い活動の進め方について

個々の発達段階や特性に応じたコミュニケーションの方法は様々であるが、社会生活の中で、自分の思いを相手に伝えることは重要である。他者とのコミュニケーションを図るために、様々な場面で「思いを伝える」場面を設定し、練習を進めていく。今回は、ペアになり、2人で話をしながら自分の考えを少しずつ引き出していくようにする。少しのつぶやきを、「それ、ええなあ」と拾いあい、「こんなんも、あるんちゃう？」などと広がっていくことを目指す。2人の意見として自信を持って他のメンバーに向けて発表（ふせんを模造紙に貼りながら意見を言う）をする。その際、どちらかが代表で発表しても良いし、分担しても良い。互いの関わりも大切にする。

模造紙に貼られたふせんを見ながら、進行役が中心となって運動会に必要な役割として精選していく。その際、必要に応じて教師が支援しながら、進行役の生徒の負担が大きくなるように配慮する。

○役割分担（人選）について

その後の活動の進め方については、生徒の実態にもよるが、生徒の顔写真のカードを活用し、生徒が互いのことを考えながら適材適所に人選できるようにする。生徒が主体的に考えて進めるようにするが、教師は、個々の生徒の特性や役割内における危険事項等も考慮しながら支援していく。

バスに乗ろう

○目標となる資質・能力

規律性、道徳性

○指導のねらい

公共交通機関を利用する際に必要なルールを知る

○準備するもの

路線バスの動画、パソコン、プロジェクター、視覚提示物（ルール、手順等）、
手作りバス、バス整理券、バス停、小銭・財布（各生徒）

○教育課程、実施時期

生活単元学習（校外学習前）

○留意点など

生徒の実態によって展開部に時間を要する場合は、2時間扱いで実施してもよい

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 本時の活動を知る	・校外学習（遠足）を目前にし、生徒自身が気を付けるべき点について学習するということを知らせる
	バスに乗ろう	
展開 35分 または必要に応じて	2 実際のバス乗車の様子を動画で見る 3 手順とマナー（ルール）を確認する <確認ポイント> ・順番を守って乗車する ・整理券をとる ・静かに過ごす ・座席から立ち歩かない ・降車時には料金を支払う ・運転士にありがとうと言う ・降車後、安全に待つ 4 バスで校区内巡りをしよう ・一連の手順を実施する ・各バス停で乗降車する ・バス内のルールを守る	・実際のバス乗車の様子を見せ、マナーの良い人と悪い人に気付かせる ・乗車から降車までの一連の動きを順に確認し、発表させる ・マナーの悪い人について、どうすれば良かったかを考えさせる ・マナーの良い人を思い出させ、人に迷惑をかけないようにバスの乗降ができるように、要所で考えさせながら実施する
まとめ 10分	5 気付いたことを発表する 6 まとめ	・活動で感じたことや、危険を感じたことをそのまま発表するように促す ・遠足で実際に行動できるように伝える

◎中学部（知的障害、肢体不自由）での実施

○「バスに乗ろう」について

高等部卒業後、公共交通機関を利用し、自力での通勤が必要となったり、在学中でも余暇活動等で公共交通機関を利用したりする場合がある。利用の際の手順を知るだけでなく、マナーやルールを知り、人に迷惑をかけないように行動することが必要となる。

そこで、中学部の段階では「良い・悪い」の判断ができ、自分が実際に良い行動ができるように意識することを目標に活動を行うようにする。発達段階に応じて、その場面に応じた臨機応変の対応ができるように学習していく。

○路線バス乗降車の様子の動画について

生徒が興味を持って動画に集中できるように、学級や学年の教員が実際に近隣の路線バスでの乗降車の様子を撮影したものが望ましい。バス会社に依頼が困難な場合は、アニメ等のVTRを活用するなど工夫する。また、動画が難しい場合は、実際にその場で教員が実演することでもよい。

○校内巡りについて

可能な範囲で学部内または他学部の下承を得、校内を巡る。実際の場面を想定して、①バス内では大きな声で騒いだりせず、静かに過ごすこと、②降車予定のバス停のアナウンスが聞こえたら「降ります」ボタンを押すこと、③バスが止まってから席を立つこと、④通路が狭いので、他のお客さんと譲り合って降りること、⑤降車後は安全な場所で待つこと、などをシミュレーションする。

○「公共の場」を意識させる

公共の場では、自分以外の人がたくさん存在し、それぞれの行動をしていることに気付くようにする。他人を意識して自分の行動をコントロールすることが大切であることを伝える。また、自分が何気なくしていることが他人に迷惑をかけてしまうことがある。そんなとき、素直に謝ることができる、自分の感情をコントロールすることも大切だと教える必要がある。

特別支援

助けてもらおう

○目標となる資質

相談・支援を求める力、コミュニケーション能力

○指導のねらい

自己の理解を十分に深め、自己の相談の仕方や支援の求め方を身に付ける

○準備するもの

ワークシート×生徒数

○教育課程、実施時期

自立活動

○留意点など

授業の前後で、援助希求に対する自分の気持ちの変化に気付けるように展開する

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	1 本時のねらい及び学習内容を知る 2 ワークシート1の文を読み、AかB、またはどちらでもないかを選択し、その理由を記入する	・ねらいを板書する ・自己の障害の特性に対して、どのような理解をしているか把握する
展開 30分	3 障害者差別解消法と合理的配慮の求め方を知り、配慮の求め方を練習する 4 ワークシート3の文を読み、友だちと意見交換する	・ワークシートの（ ）には差別という言葉が入るが、「差別」の捉え方について補足説明する ・合理的配慮は本人の希望が前提となることを伝える ・悩みごとを相談すること、助け（支援）を求めることについて抵抗感を持つ生徒もいることに留意する
まとめ 5分	5 本時の学習を振り返り、感想を書く	・人に相談すること、助けを求めることについて、授業を受ける前と授業を受けたあとに分けて記入させる ・授業を受ける前と授業を受けたあとでどのような変化があるかを教員は確認をし、適宜声をかける

○導入について

ワークシート1の文は、特別支援学校高等部の生徒が、現場実習に行ったときの一コマである。会社で実習するにあたり、会社の方から仕事内容について説明を受ける。近年では、障害者雇用促進法の影響により障害者雇用が増えたことから、会社側も障害者への対応に慣れてきている。とはいえ、まだまだ障害特性を理解した上での対応（指示を出すときの配慮など）は十分とは言えない。障害のある人々を取り巻く社会環境（障害者差別解消法の施行）や障害についての考え方（ICF）等の大きな変化を踏まえると、自らが必要な配慮を求めることが重要となってくる。しかしながら、自分が困っていることを相手に伝えたり、支援を求めたりすることに抵抗感を持っている生徒も少なくない。そこで、本授業案では、人に相談したり助けを求めたりできるようになるために、まずは「相談してよかった」と思える体験をすることで、相談動機の向上につなげたい。また、本授業をきっかけにして、生徒が「相談してよかった」と思える機会を作ることができるよう、授業後の学校生活等において今まで以上に教師の関わり方が大切になる。

○展開について

障害者差別解消法は、障害のある生徒にとって社会で生活する上で密接に関係する法律である。そのことを理解させた上で、配慮を受けながら働くことの重要性に気付かせたい。軽度知的障害のある生徒の中には、障害があることを知られたくないと思い、障害者雇用枠で働くことに抵抗感を持っている者もいる。障害を受容することは時間が必要で、完全な受容は難しいことであるとも考えられる。しかしながら、社会生活をする上での生きづらさがあるからこそ、自分自身で生きやすさを探究する必要がある。自分の生きづらさを理解してもらえそうな人に相談し、何に困っているのかを整理してもらうことも一つの方法であることに気付かせたい。

○まとめについて

まとめでは、本時の学習を振り返り、感想を記入させる。ワークシート「4 今日の授業の感想を書きましょう」では授業を受ける前と授業を受けた後での変化が分かるように、「問1」「問2」で書いた内容と、授業を受けて考えたことや思ったこととを比較させながら記述できるようにする。その際、教師は人に相談することや助けってもらうことについて心境の変化などがあったかを確認し、プラスの変化が見られた場合には肯定的な声かけを行い、支援を求めることに対する抵抗感を減らし、自信を付けさせることができるよう留意する。

資料

- 「特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（平成30年3月）」（文部科学省）
- 「県立学校における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応要領（平成28年4月1日施行）」
(兵庫県教育委員会)

【授業のねらい】一人で悩まず人に助けてもらい、生きやすく生きよう！

1 次の文を読んで、問1と問2に答えましょう。

〇〇会社へ現場実習に行った時のことです。会社から作業についての説明がありました。とても長い説明で、覚えることがたくさんありました。学校では、授業でメモをとる練習をしていましたが、メモがとれないくらい速いスピードで説明されました。

A



私は覚えることが苦手で、メモがとれないんです。すべて自分が悪いです。だから自分がもっとがんばるしかないと思っています。

覚えることが苦手だと仕事ができないですね。困りましたね。



会社の人

B



私は覚えることが苦手なので、説明は言葉だけではなく、文字で書いて説明していただけると理解しやすいです。

覚えることが苦手なんですね。そうですね。文字で書くとう理解しやすいんですね。わかりました。そのようにします。



会社の人

問1 あなたは、AとB、どちらのタイプが似ていますか。または、AとBどちらでもないかもしれません。あてはまるものを○でかこみましょう。

A ・ B ・ どちらでもない

問2 問1で選んだものについて、どのことばが自分と似ていると思いましたか。自分と似ていると思ったことばを2つまで書きましょう。

① _____

② _____

2 障害者差別解消法と合理的配慮のことを知っておきましょう。

- (1) 平成28年4月から、障害者（差別）解消法という法律がはじまりました。
この法律は、「あなたは障害者だから〇〇はできません」という（差別）を禁止するものです。
- (2) 合理的配慮とは、かんたんに言えば、学校での生活や会社で働くときに、学校や会社に頼めば（配慮）が受けられるものです。配慮を受けるためには、学校や会社と話し合いが必要です。
- (3) (2) の合理的配慮を受けるための練習をしましょう。
- 【練習1】さわがしいところでは、耳せんをつけたいとき
- 【練習2】仕事を覚えるために、タブレット端末を使いたいとき

3 次の文を読んで思ったことについて、友だちと意見交換しましょう。

Aさん（特別支援学校の卒業生）が高等部2年生だった時の話です。
Aさんは、いつも何をやってもうまくいかない、周りの人よりも自分ではできないことが多いと悩んでいました。しだいにAさんは、「どうせ私には障害があるし」とぐちを言うことが多くなり、卒業して働くことについても前向きになれませんでした。ある日、担任の先生から、「悩みごとがあるときは人に話すと楽になるよ」とアドバイスをもらいました。また、Aさんの先輩であるBさんから、「会社で信頼できる人に相談したら、助けてもらえるようになって、とても働きやすくなった」という話を聞きました。Aさんは、担任の先生からのアドバイスとBさんからの話を聞いたことで、これまでの考え方が少し変化しました。その後Aさんは、仲の良い友だちや信頼できる先生に、相談したり、助けを求めることができるようになりました。

4 今日の授業の感想を書きましょう。

人に相談すること、助けを求めることについて思ったこと、分かったこと。

今日の授業で分かったことは（ ）です。

人に相談したり、助けを求めたりすることについて思うことは、

（ ）です。

第 3 章

特別活動プラン

集団活動を柱とした活動プラン

時期	形態	主題	内 容	備 考
4 月	授業 1	新入生歓迎会を成功させよう	- 自己理解と行動の調整 - 見通しを持って考える - 思いやり、他者理解	リーダーとしての意識の高まり
	事前学習	各班での準備	- 自己選択、自己決定 - 協力 - 見通しを持って行動する	限られた時間内で役割を実行する
	新入生歓迎会		- 行動の調整 - 他者との関わり - 自己肯定感を高める	場に応じた判断
	事後学習	振り返り	- 時間の経過にそって出来事を振り返る - 自分の気持ちを表現する - 自己肯定感を高める	生活への意欲の高まり

(授業の概要)

番号	授業名	授業の概要	資料等 (つきたい力)
授業 1	新入生歓迎会を成功させよう	①高等部 3 年生 (最高学年) になった思いや決意を発表する ②新入生歓迎会のプログラムを考える ③役割分担をする ④各班に分かれて活動内容について相談する ⑤決定した活動内容を発表する	仲間づくり・絆づくり 思いや考えの表現力 ※授業例は授業 1 のみ掲載。事前・事後学習についても、「つきたい力」を意識し、生徒の主体性を引き出すように指導する。
事前学習	各班での準備	①買い物→調理 (会食班) ②会場の飾り作成 (装飾班) ③ゲームの内容を考える→司会等の役割分担 (ゲーム班) ④「歓迎のことば」を考える (進行班)	自尊感情・自己効力感
事後学習	振り返り	①自分の役割を振り返る ②良かったこと、楽しかったことを発表する ③次に行きたいところ、やってみたいことを考える	思いや考えの表現力 自尊感情・自己効力感

宿泊行事に向けた取組

時期	形態	主題	内 容	備 考
いじめ未然防止につなげるために、宿泊行事を通して、規律性や道徳性、コミュニケーション能力を育成することが期待できる				
事前	＜児童生徒の意欲を高めるために、事前学習で見通しを持たせる＞			
	学活	〇〇へ行こう (〇〇は宿泊行事の場所)	・見通しをもつ ・ねらいや日時、行き先の確認する	児童生徒が意欲的に宿泊行事に取り組めるよう工夫する 例１：プレゼンテーション資料を作成し、視覚化する 例２：現地の写真を提示したり、実物に触れさせたりして具体的に示す
	＜事前学習後、宿泊行事時に想定される「困りそうな場面への対応【授業１】」や「公共交通機関の利用【授業２】」について理解を促す＞			
	授業１	こんなときどうするの	・場面に応じた声かけの仕方について考える ・コミュニケーションを図ることのよさについて考える (コミュニケーション能力、思いや考えの表現力)	＜教師用資料１～３＞を活用し、場面の登場人物のセリフについて考えさせる 教員は、宿泊施設や見学施設で児童生徒が困りそうな場面をイメージさせ、児童生徒に課題を気付かせる 教員は、児童生徒の発達の状態や程度に応じて、身体活動を取り入れたり、絵カード等を使って表現させたりする
	授業２	バスに乗ろう	・公共交通機関の乗車手順を確認する ・乗車時のマナーを動画や写真等を見て、理解する (規律性、道徳性)	乗車から降車までの一連の動きを児童生徒に確認させる 児童生徒に公共交通機関の乗車時のマナー等を理解させるだけでなく、他人に迷惑をかけた場合に謝罪すること等も理解させる
当日	宿泊行事		・これまでの授業内容を活用する	
事後	＜宿泊行事を通して、児童生徒に困った場面を想起させ、児童生徒が日常場面でも生かすことができるよう【授業３】を実施する＞			
	事後学習	振り返り	・宿泊行事を通して、嬉しかったことや困ったこと等を想起する	教員は、宿泊行事で起こった場面を想起させるために、写真等を用意しておく
	授業３	うまく伝える方法	・自分の気持ちや思い、考えを相手にわかりやすく表現する ・実際に遭遇した困った場面での適切な伝え方について考える (コミュニケーション能力、思いや考えの表現力)	自分の思いを伝えやすくするために、児童生徒に【授業１】を想起させる 宿泊行事で、児童生徒に困った場面を想起させ、どのように相手に伝えれば良かったかについて考えさせる 絵カードを用意したり、授業の中で言語化したりする等、児童生徒の発達の状態や程度に応じて対応する 困った場面を「劇化」することで、学習したことの般化を促す 宿泊行事の時だけでなく、日常場面でも適切な声掛けができるよう、児童生徒に促す

(授業の概要)

番号	授業名	授業の概要	主な資料等
授業１	こんなときどうするの	①自分の日常的な行動を想起する ②登場人物のセリフや気持ちを考えて話し合う ③まとめ	＜教師用資料１～３＞ ※児童生徒の発達の状態や程度に応じて、宿泊施設や見学施設の写真を用意する
授業２	バスに乗ろう	①乗車にあたっての手順とマナーを知る ②スクールバスを用いて、乗車にあたっての手順を体験する	・バス路線図及び運賃表 ※プログラムにあるように、実際のバス乗車の様子を動画で見られるように、バス会社に許可を得て撮影する
授業３	うまく伝える方法	①宿泊行事の様々な場面を想起する ②困った場面に遭遇した時の気持ちを考えて話し合う ③まとめ	＜ワークシート＞ ※教員は、＜自立活動「うまく伝える方法」ワークシート＞を宿泊行事で困った場面に変更し、児童生徒に提示する

運動会を柱とした活動プラン

時期	形態	主題	内 容	備 考
1.5ヶ月前	授業1	運動会を盛り上げよう	・見通しを持って考える ・自己選択、自己決定	リーダーとしての意識の高まり
1ヶ月前	例	応援合戦がんばるぞ	・協力 ・思いやり、他者理解 ・自己肯定感を高める	下級生の実態を考慮する
当日	運動会		・行動の調節 ・他者との関わり ・自己肯定感を高める	場に応じた判断
	事後学習	振り返り	・種目、場面にそって出来事を振り返る ・自分の考えを深め、表現する	生活への意欲の高まり ※各種目に係る練習については割愛

(授業の概要)

番号	授業名	授業内容	資料等（つけない力）
授業1	運動会を盛り上げよう	①運動会で必要な役割について話し合う ②役割分担をする（班分け） ③班ごとに目標、仕事内容、気を付けることについて話し合う ④話し合った内容を発表する	自治集団づくりに資する力 規律、道徳性 セルフコントロール能力
例	応援合戦がんばるぞ	①応援団長、副団長を決定する ②応援合戦のテーマについて話しあう ③応援合戦の流れを考える ④下級生の動きを考える ⑤曲、準備物など、詳細について考える	コミュニケーション能力 思いや考えの表現力
事後学習	振り返り	①自分の役割について振り返る ②下級生との交流について、気付いたことを発表する ③次年度、取り入れてみたい種目などについて話し合う	思いや考えの表現力 仲間づくり、絆づくりに資する力

修学旅行を柱とした活動プラン

時期	形態	主題	内 容	備 考
事前	事前学習①	修学旅行に行こう	- 意欲を高める：「修学旅行に行きたい！」 - 見通しを持つ：日時、行き先、内容を知る	※下見で撮影した写真を用いてプレゼンテーション資料を作り、視覚的に示す
<修学旅行に対する見通しを持たせ、子どもたちの意欲を高めるために【授業1】を実施する。また、修学旅行時に想定される「買い物」と「公共交通機関の利用」についての理解を促す>				
	授業 1	これは、なんでしょう	- 自分の気持ちを表現する - 協力、他者との関わり (セルフコントロール能力、思いや考えの表現力、仲間づくり・絆づくりに資する力)	現地の写真等を用いてクイズを行い、友だちと一緒に回答を考えさせる クイズは現地のキャラクターや観光地についてヒントを出してシルエットクイズにしたり、一部分だけ見せたりする
	授業 2	買い物に行こう	計画力：予算の範囲内で購入する (自尊感情・自己肯定感、相談・支援を求める力)	好きなおやつを選び、計算する 修学旅行先のお土産リスト等を作成し、購入計画を立てる
	授業 3	バスに乗ろう	- 公共交通機関の利用 - 運賃の計算 (規律性、道徳性)	修学旅行先で利用する公共交通機関を確認し、乗車区間や運賃を調べる スクールバスを活用し、実際に運賃の支払いや乗車マナーを体験する
	事前学習②	ホテルでの過ごし方	- ユニットバス利用上のマナー - レストランでの食事マナー	※下見で撮影した写真を用いてプレゼンテーション資料を作り、視覚的に示す
当日	修学旅行		- これまでの授業内容の活用 「ねらい」「日程」 「他者とのかかわり」 「予算範囲内での買い物」 「公共交通機関の利用」 「ホテル利用時のマナー」	
事後	事後学習	振り返り	- 時間の経過にそって出来事を振り返る - 自分の気持ちを表現する	振り返りがしやすいよう、修学旅行先の写真を用いて場面を提示し、視覚的に示す 気持ちの表現がしやすいよう、「表情のカード」等を用いる

(授業の概要)

番号	授業名	授業の概要	主な資料等
事前学習①	修学旅行に行こう	①修学旅行の概要を知る ②修学旅行当日までの予定を知る	・下見で撮影した写真を用いて、いつ、誰と、どこへ行くのか、また、何をするのかを視覚的に示す ・プレゼンテーションソフト等を活用し、視覚的に示す
授業 1	これは、なんでしょう	①修学旅行の行先や体験することが分かる写真を見て発表する ②分からなかった写真は友達と相談する	・プログラムでは、ぬいぐるみや絵カードを用いているが、本プランの場合は、旅行先の写真や現地ならではのお土産などを用いる
授業 2	買い物に行こう	①修学旅行に持参するおやつを予算内で買う ②修学旅行先でお土産を予算内で買う	・おかしが掲載されたホームページ ・現地のお土産が分かるパンフレット等 ・お土産リスト作成用紙
授業 3	バスに乗ろう	①乗車にあたっての手順とマナーを知る ②スクールバスを用いて、乗車にあたっての手順を体験する	・バス路線図及び運賃表 ・プログラムにあるように、実際のバス乗車の様子を動画で見るために、バス会社に許可を得て撮影する
事前学習②	ホテルでの過ごし方	①ユニットバスやベッドの利用方法を知る ②ホテルでの食事（バイキング）のマナーを知る	・下見で撮影した写真 ・ホテルのホームページ ・バイキング時のマナーを動画で示す等
事後学習	振り返り	①修学旅行の出来事を振り返る ②楽しかったことを発表する ③次に行きたいところ、やってみたいことを発表する	・修学旅行の行程がわかる資料 ・表情カード

校外活動を柱とした活動プラン

時期	形態	主題	内 容	備 考
1学期～	授業 1	これは、なんでしょう	・ 成就感を味わう ・ 他者との関わり ・ 自己理解と行動の調整	ルールを守る
	授業 2	買い物に行こう	・ 自己選択、自己決定 ・ 電卓を活用した計算	決められた範囲で選択する
	授業 3	バスに乗ろう	・ 公共交通機関の利用 ・ あいさつをする	人に迷惑をかけない
	事前学習	遠足に行こう	・ 意欲を高める ・ 見通しを持つ	
10月 当日	校外学習	(個別・集団指導)	・ これまでの授業内容の活用 「公共交通機関（バス）の利用」 「行動の調整」 「他者との関わり」 「自己肯定感を高める」	
	事後学習	楽しかった思い出	・ 時間の経過にそって出来事を振り返る ・ 自分の気持ちを表現する	生活への意欲の高まり

(授業の概要)

番号	授業名	授業内容	資料等（つきたい力）
授業 1	これは、なんでしょう	①チーム、役割分担を決める ②ルールを確認する ③〇〇ゲームをする ④感想を発表する	セルフコントロール能力
授業 2	買い物に行こう	①決められた予算の中でおやつを選ぶ ②電卓を活用して計算する ③買い物学習（校内シミュレーション）を行う ④買い物学習（校外）を行う	自尊感情・自己効力感
授業 3	バスに乗ろう	①路線バスの動画を見る ②マナー（ルール）を確認する ③手順を確認する ④手作りバスに乗って校内巡りをする ⑤マナーについて気付いたことを発表する	規律・道徳性
事前学習	遠足に行こう（事前学習）	①歌を歌う ②遠足の内容を知る（行き先、期日、持ち物等） ③遠足の約束を確認する ④遠足で行うゲームを話し合う ⑤目標を発表する	コミュニケーション能力
事後学習	楽しかった思い出	①遠足の出来事を振り返る ②楽しかったことを発表する ③次に行きたいところ、やってみたいことを考える	思いや考えの表現力

第4章

アンケートツール

「CoCoLo-34」について

「CoCoLo-J」について

「いじめ未然防止プログラム」の活用に生かせるアンケート

「CoCoLo-34」の利用について

「CoCoLo-34」は「いじめ未然防止プログラム」の活用時に生かせる実態アンケートです。取組の前後に児童生徒を対象に実施することによって、児童生徒の資質・能力の様子を分析しやすくなり、分析の結果をもとに、授業プランの選択や、取組内容の検討、取組の評価等に生かすことができます。

「CoCoLo-34」の特徴

<アンケート用紙>

- 34 項目の質問に○をつけて答えるだけの簡単なアンケート
- 児童生徒自身がいじめをしない、させない、見逃さないために育みたい 11 の資質・能力がどの程度身についているかを測定
- 所要時間は 5 ～10 分程度
- 小学校 5 年生から高校 3 年生までの児童生徒に実施可能

<分析ツール>

- 結果を入力するだけで分析用の資料を自動で作成
- 自校の児童生徒の 11 の資質・能力の様子をグラフ等で視覚的に表示
- 推奨される授業プランが自動で選択され、授業案の表示も可能

利 用 手 順

- 1 <アンケート用紙>をダウンロードし、児童生徒数印刷する
※両面印刷すると見開き 1 枚になります
- 2 教員が、表紙に記載されている注意点を読み上げた後、児童生徒に回答させる
※正直な思いを記入しやすくするために無記名で実施することを想定していますが、学校の判断で、余白等に氏名や出席番号等の記入をさせても構いません
- 3 回収した<アンケート用紙>の表紙に、通し番号を記入する
※出席番号等を記入させている場合は、その番号で代用することも可能です
- 4 <分析ツール>に、学校名等の基本情報を入力後、アンケートを実施した児童生徒の回答（0～3の数値）等を入力する
- 5 入力が終われば、「結果シート①」「結果シート②」が自動で作成されているので、それぞれのシートを印刷し、学年会議等の資料にする

結果シートについて

「結果シート」はアンケートの集計結果をグラフ等で視覚的に示しています。学年会議等で、この資料を参考にしながら児童生徒の様子を分析することで、実施する授業プランの選択や、今後の取組内容の検討等が行えます。また、取組の事後に再度「CoCoLo-34」を実施すれば、取組の評価や再検討に活用することもできます。

1 「結果シート①」について

(1) 「全体の様子」

11 の資質・能力がどの程度身についているかを、基準値を 0 としたレーダーチャートで示しています。

- ・ 11 角形の大きさ…大きいほどよく身についている
- ・ 11 角形の形……正 11 角形に近いほどバランスがよい

(2) 「分布の様子」

11 の資質・能力それぞれについて、児童生徒一人一人の回答を「低い」「やや低い」「標準」「やや高い」「高い」の 5 段階で評定し、評定ごとの人数を棒グラフで示しています。カテゴリ別においても同様に表示しています。

- ・ 「低い」と判定された人数が多い資質・能力に対しては、集団及び個別に向けた取組の内容等、その対応の在り方について十分な協議を行ってください
- ・ 児童生徒一人一人の結果は「(参考) 個人別評定」のシートで確認できます

(3) 「強みとして伸ばしたい資質・能力」「課題となる資質・能力」

「全体の様子」において得点の高かった、または低かったカテゴリ 1 つと資質・能力 2 つを表示しています。また、「分布の様子」において「高い」または「低い」と判定された児童生徒の多い資質・能力を 2 つ表示しています。

- ・ 「全体の様子」は全体の平均的な傾向、「分布の様子」はその人数分布が示されているので、結果が一致するとは限りません
- ・ 教員が日ごろの観察から感じている様子と、この結果を合わせて考察することで、より適切な分析が行えます

(4) 「参考となる授業プラン」

「課題となる資質・能力」で示された資質・能力の向上が期待できる授業プランを表示しています。パソコンの画面上では、表示されている授業プラン名をクリックすると、それぞれの授業案の PDF ファイルが表示され、印刷することができます。

- ・ 授業プランの実施だけでなく、児童生徒会活動や様々な行事等と関連付けた組織的な取組を行うことで、より効果が期待できます
- ・ 「いじめ未然防止プログラム」の中の「特別活動プラン」に、授業プランを柱とした組織的な取組の例を紹介していますので活用してください

2 「結果シート②」について

各質問項目における回答ごとの人数を、男女別に示しています。「いじめに関連する項目」は 11 の資質・能力に関するものではなく、いじめの「加害」「被害」「個人の傍観」「集団の傍観」の行動に関する項目です。いじめ関連行動の実態把握等に活用できます。

アンケート調査へのご協力のお願い

❀ このアンケート調査は、みなさんの学校生活に関する調査です。



❀ この調査は、学校の成績とは全く関係ありません。また、それぞれの質問には、正しい答えや間違った答えというものはありません。ですから、現在のあなたのことを正直に答えてください。

❀ この調査への回答は強制的なものではありません。答えたくない時には途中でやめてもかまいません。

❀ プライベートなことなので他の人のアンケートを見てはいけません。

❀ 回答後に記入漏れがないか必ず確認をしてください。

はじめに記入してください。

ねんせい 年生	くみ 組	せいべつ 性別	： おとこ 男 ・ おんな 女
------------	---------	------------	-----------------------

(どちらかに○)



【Q1】下の1番から27番の内容は、普段のあなたにどれくらい当てはまりますか。「全然当てはまらない」ものを0、「すごく当てはまるもの」を3として、一番近いと思う数字に○を書いてください。

		全然 当ては まらな い	あ まり 当て はまら ない	だ いた いま る	す こ く 当て はま る
1	いやなことがあったときには、それを繰り返さないよう工夫をしている	0	1	2	3
2	ちょっとしたことで、怒ったりすねたりしない	0	1	2	3
3	今の自分にだいたい満足している	0	1	2	3
4	友だちが悪いことをしようとしているときには止めようとする	0	1	2	3
5	困っている人がいたら、助けている	0	1	2	3
6	相手に迷惑をかけたときには、素直に謝る	0	1	2	3
7	友だちのいやがることをしたり言ったりする	0	1	2	3
8	友だちから何かを頼まれたり、誘われたりすると、断りたくてもうまく断れない	0	1	2	3
9	ひとりで解決できないときは、誰かに相談する	0	1	2	3
10	いやなことがあったときには、何が原因かを考えるようにしている	0	1	2	3
11	人から注意や批判をされたとき、怒ったりすねたりしない	0	1	2	3
12	自分には良いところが、いくつかある	0	1	2	3
13	友だちのしていることを良くないと思ったときには、注意する	0	1	2	3
14	友だちにいやなことをされたり言われたりする	0	1	2	3
15	ひとりぼっちの子がいたら、声をかけている	0	1	2	3
16	自分が間違っていたときには、素直に認める	0	1	2	3
17	いやなことをされても相手に「やめて」と言えない	0	1	2	3
18	つらいことや困ったことがあったときには、誰かに助けをもらう	0	1	2	3

19	いやなことがあったときには、どうすれば良いか考えるようにしている	0	1	2	3
20	友達からいやなことを言われたとき、すぐにカッとなったりしない	0	1	2	3
21	いじめがあるとわかっていても関わらない	0	1	2	3
22	自分には人にじまんでできることが、いくつかある	0	1	2	3
23	人に対する暴力や暴言を見たとき、やめさせようとする	0	1	2	3
24	落ち込んでいる人がいたら、励ましている	0	1	2	3
25	人に助けてもらったとき、素直に「ありがとう」と言う	0	1	2	3
26	自分の考えが相手と違っているかも知れないときには、自分の考えを言えない	0	1	2	3
27	どうすればいいか迷ったとき、誰かに相談する	0	1	2	3

【Q2】下の1番から7番の内容は、普段のあなたクラスのようにすにどれくらい当てはまると思いますか。「全然当てはまらない」ものを0、「すごく当てはまるもの」を3として、一番近いと思う数字に○を書いてください。

		全然 当ては まらな い	あま り は まら ない	だ いた ま い る	す こ く は ま る
1	私のクラスはみんな仲がいい	0	1	2	3
2	私のクラスは、学級や班での活動にみんな協力している	0	1	2	3
3	私のクラスは、決められたことを守っている	0	1	2	3
4	私のクラスは、とても居心地がよい	0	1	2	3
5	私のクラスは、お互いに注意しあえる	0	1	2	3
6	私のクラスは、授業中と休み時間のけじめがある	0	1	2	3
7	私のクラスは、いじめがあれば知らんぷりをしない	0	1	2	3

アンケートはこれで終わりです。記入もれがないか、確かめてくださいね。

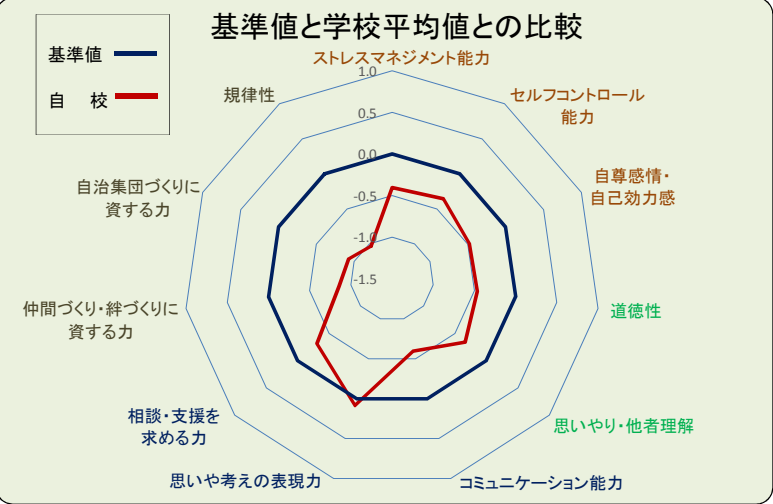




きょうりょく
ご協力ありがとうございました。

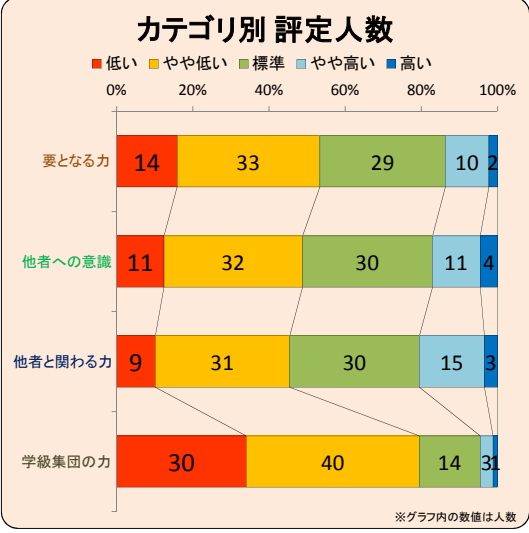
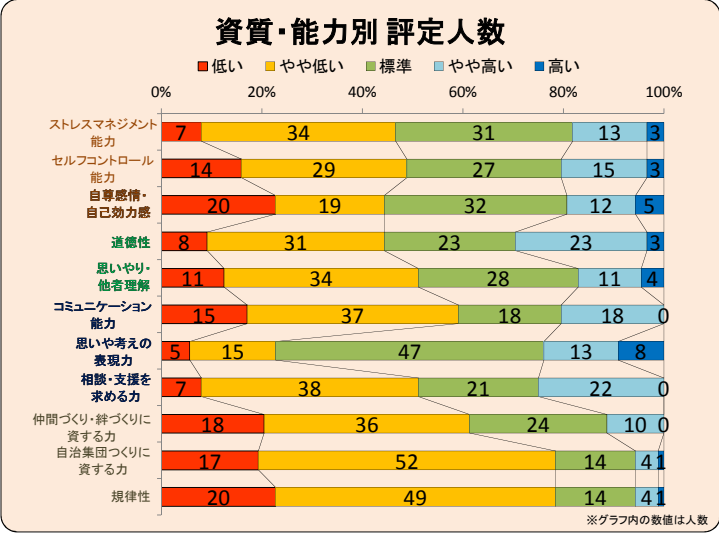


全体の様子



カテゴリと資質・能力について		
(カテゴリ)	(資質・能力)	(内容)
要となる力	ストレスマネジメント能力	自分のストレスとうまくつきあっている能力
	セルフコントロール能力	自分の感情の高まりやそれによる行動を自己制御できる能力
	自尊感情・自己効力感	自分の存在価値を認識し、自分に自信が持てる感覚
	道徳性	道徳的価値感に基づいた実践力
他者への意識	思いやり・他者理解	他者への気遣いや優しさを持って行動する力
	コミュニケーション能力	人間関係を良好に保とうとすることができる能力
他者と関わる力	思いや考えの表現力	自分の思いや考えを、うまく表現できる力
	相談・支援を求める力	自ら他者に相談や支援を求められる力
	仲間づくり・絆づくりに資する力	心通い合う集団を主体的に目指せる力
学級集団の力	自治集団づくりに資する力	児童生徒同士で良い集団となろうとする力
	規律性	集団生活を乱さない行動力

分布の様子



強みとして伸ばしたい資質・能力

全体の様子より	カテゴリ別	他者と関わる力	「全体の様子」で得点が最も高いカテゴリを1つ表示しています 自校の強みとして更に伸ばしていきたい特徴と考えられます
	資質・能力別	思いや考えの表現力 相談・支援を求める力	「全体の様子」で得点が高い資質・能力を2つ表示しています 自校の強みとして更に伸ばしていきたい特徴と考えられます
分布の様子より	資質・能力別	思いや考えの表現力 自尊感情・自己効力感	「分布の様子」で「高い」と判定された児童生徒が多い資質・能力を2つ表示しています 資質・能力が特に高い児童生徒の傾向と考えられます

課題となる資質・能力

全体の様子より	カテゴリ別	学級集団の力	「全体の様子」で得点が最も低いカテゴリを1つ表示しています 基準値と比較したときの自校の課題と考えられます
	資質・能力別	規律性 自治集団づくりに資する力	「全体の様子」で得点が低い資質・能力を2つ表示しています 自校の課題として積極的に育んでいきたい資質・能力だと考えられます
分布の様子より	資質・能力別	自尊感情・自己効力感 規律性	「分布の様子」で「低い」と判定された児童生徒が多い資質・能力を2つ表示しています 資質・能力が特に低い児童生徒の課題の傾向と考えられます

参考となる授業プラン

※「課題となる資質・能力」を対象とした授業プランを示しています

規律性	自治集団づくりに資する力	自尊感情・自己効力感
「オリジナルボールゲームを発明しよう」	「マナーブックづくり」	「私は私が好きです。なぜなら…」
「救える自分になろう」	「自分らしさとその人らしさ」	「私ってどんな人？」
		「役割交換てがみ」

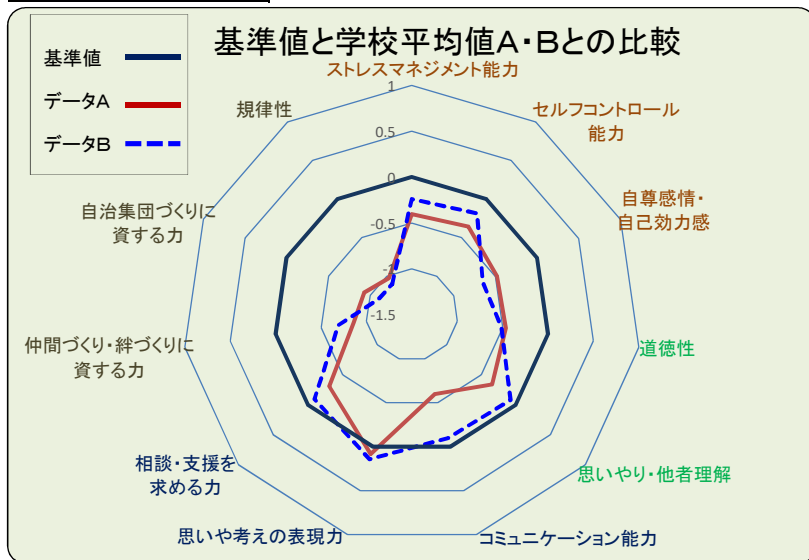
「CoCoLo-34」結果比較シート

作成日：2021年12月25日

研修市立こころ中学校 2年生 1組

A	4月
B	11月

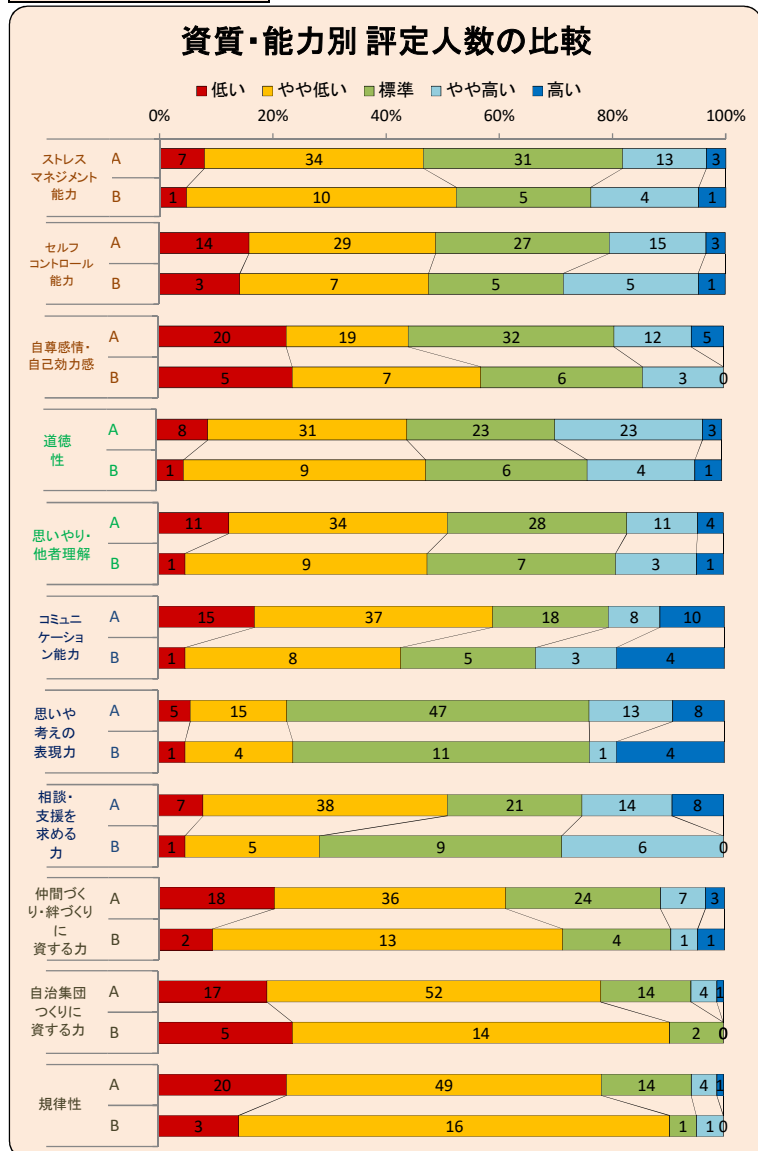
全体の様子



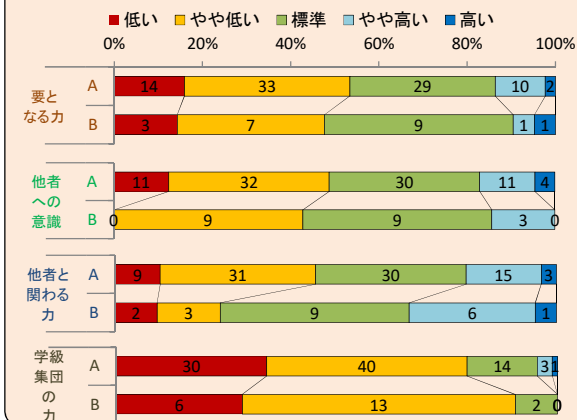
カテゴリと資質・能力について

(カテゴリ)	(資質・能力)	(内容)
要となる力	ストレスマネジメント能力	自分のストレスとうまくつきあっている能力
	セルフコントロール能力	自分の感情の高まりやそれによる行動を自己制御できる能力
	自尊感情・自己効力感	自分の存在価値を認識し、自分に自信が持てる感覚
他者への意識	道徳性	道徳的価値感に基づいた実践力
	思いやり・他者理解	他者への気遣いや優しさを持って行動する力
他者と関わる力	コミュニケーション能力	人間関係を良好に保とうとすることができる能力
	思いや考えの表現力	自分の思いや考えを、うまく表現できる力
	相談・支援を求める力	自ら他者に相談や支援を求められる力
学級集団の力	仲間づくり・絆づくりに資する力	心通い合う集団を主体的に目指せる力
	自治集団づくりに資する力	児童生徒同士で良い集団となろうとする力
	規律性	集団生活を乱さない行動力

分布の様子



カテゴリ別 評定別人数の比較



(平均値の高い方が網掛け)

資質・能力		Aの平均値	Bの平均値	差(B-A)
要となる力	ストレスマネジメント能力	1.61	1.71	0.10
	セルフコントロール能力	1.55	1.67	0.12
	自尊感情・自己効力感	1.17	1.05	-0.12
他者への意識	道徳性	1.33	1.30	-0.03
	思いやり・他者理解	1.54	1.71	0.17
他者と関わる力	コミュニケーション能力	2.02	2.29	0.27
	思いや考えの表現力	1.75	1.79	0.04
	相談・支援を求める力	1.56	1.73	0.17
学級集団の力	仲間づくり・絆づくりに資する力	1.43	1.55	0.12
	自治集団づくりに資する力	1.28	1.17	-0.11
	規律性	0.79	0.74	-0.05
カテゴリ別	要の力	1.44	1.48	0.04
	他者への意識	1.44	1.51	0.07
	他者と関わる力	1.78	1.94	0.16
	学級集団の力	1.17	1.15	-0.02

※平均値の欄は質問1項目あたりの平均得点(3点満点)を示しています。

「いじめ未然防止プログラム」の活用に生かせるアンケート

「CoCoLo-J」の利用について

「CoCoLo-J」は「いじめ未然防止プログラム」の活用時に生かせる小学校低・中学年用のアンケートです。取組の前に教員が回答することによって、児童の資質・能力の様子を分析しやすくなり、分析の結果をもとに、授業プランの選択や、取組内容の検討、取組の評価等に生かすことができます。

「CoCoLo-J」の特徴

<アンケート用紙>

- 質問は 30 項目で、2名の教員で回答、所要時間は5～10 分程度
- 児童自身がいじめをしない、させない、見逃さないために育みたい 11 の資質・能力に関する言動の様子を示した質問項目
- 小学校1年生から4年生までの児童を対象として実施可能

<分析ツール>

- 結果を入力するだけで分析用の資料を自動で作成
- 対象児童の 11 の資質・能力に対する教員の理解をグラフ等で視覚的に表示
- 推奨される授業プランが自動で選択され、授業案の表示も可能

利 用 手 順

1 <アンケート用紙>をダウンロードし、2部印刷する

※「担任」用と「そのクラスによく関わっている先生」用の2部

2 「担任」と「そのクラスによく関わっている先生」の2名の教員が回答する

※1クラスにつき必ず2名で回答してください

※同じクラスについて回答する2名の先生は、お互いに相談したり見せ合ったりせずに、御自身の考えで、別々の用紙に回答してください

3 <分析ツール>に、学校名等の基本情報を入力後、アンケートを実施した2名分の回答(数値等)を入力する

4 入力が終われば、「インベントリーシート」が自動で作成されているので、そのシートを印刷し、回答した2名の先生で「インベントリーシート」を見ながらそのクラスの状況や課題、今後の取組の在り方等を協議し、実践に生かす

※回答した2名によるこの協議を十分に充実させることが大変重要となります

※別紙「インベントリーシートの見方と活用」をよく読んでから協議してください

<回答の際の注意>

- このアンケートは、1クラスにつき、「担任の先生」と「隣のクラスの担任や専科等、このクラスによく関わっている先生」の2名で回答してください。
- 同じクラスについて回答する2名の先生は、お互いに相談したり見せ合ったりせずに、御自身の考えで、別々の用紙に回答してください。

設問1 ①このクラスに次のような児童はどれくらいいますか。右の①の欄の5～1から当てはまる数字を1つ選んで○を記入してください。

②また、これらの様子が現在、そのクラスの強みとなっていると感じるものであれば「○」を、課題となっていると感じるものであれば「×」を右の②の欄に記入してください(いくつでも構いません)。

質問番号	児童の様子	①このような児童が… 多い・やや多い・半数ほど・やや少ない・少ない 5 4 3 2 1	②そのクラスの… 強み○ 課題× (どちらでもないは空欄)
1	嫌なことがあっても、気持ちを切り替えることができる	5 4 3 2 1	
2	ちょっとしたことで、怒ったりすねたりしない	5 4 3 2 1	
3	「どうせ自分なんて」「どうせ無理だ」など自分を否定するような発言をしない	5 4 3 2 1	
4	困っている人がいたら、助けている	5 4 3 2 1	
5	友だちが悪いことをしようとしているときに、止めようとする	5 4 3 2 1	
6	相手に迷惑をかけたときに、素直に謝る	5 4 3 2 1	
7	友だちから何かを頼まれたり、誘われたりしたときに、うまく断ることができる	5 4 3 2 1	
8	ひとりで解決できないときに、大人に相談する	5 4 3 2 1	
9	嫌なことがあっても、どうすればよいかを考えることができる	5 4 3 2 1	
10	人から注意や批判をされたときに、怒ったりすねたりしない	5 4 3 2 1	
11	好きなことに自信をもって取り組むことができる	5 4 3 2 1	
12	ひとりぼっちの子がいたら、声をかけている	5 4 3 2 1	
13	友だちのしていることを良くないと思ったときに、注意する	5 4 3 2 1	
14	自分が間違っていたときに、素直に認める	5 4 3 2 1	
15	嫌なことをされたときに、相手に「やめて」と言える	5 4 3 2 1	
16	つらいことや困ったことがあったときに、誰かに助けを求めようとする	5 4 3 2 1	
17	嫌な気持ちを押し込めたり爆発させたりせずに、うまく発散できる	5 4 3 2 1	
18	友だちから嫌なことを言われたときに、すぐにカッとなったりしない	5 4 3 2 1	
19	自分の良いところを言える	5 4 3 2 1	
20	困っている子に対して声掛けなどの援助を行っている	5 4 3 2 1	

次のページへ続く

質問 番号	児童の様子	①このような児童が… 多い・やや多い・半数ほど・やや少ない・少ない 5 4 3 2 1	②そのクラスの… 強み○ 課題× (どちらでもないは空欄)
21	人に対する暴力や暴言を見たときに、やめさせようとする	5 4 3 2 1	
22	人に助けてもらったときに、素直に「ありがとう」と言う	5 4 3 2 1	
23	自分の考えが相手と違っているかもしれないときに、自分の考えを言える	5 4 3 2 1	
24	どうすればいいか迷ったときに、大人に相談する	5 4 3 2 1	
25	嫌なことがあっても、前向きに行動することができる	5 4 3 2 1	

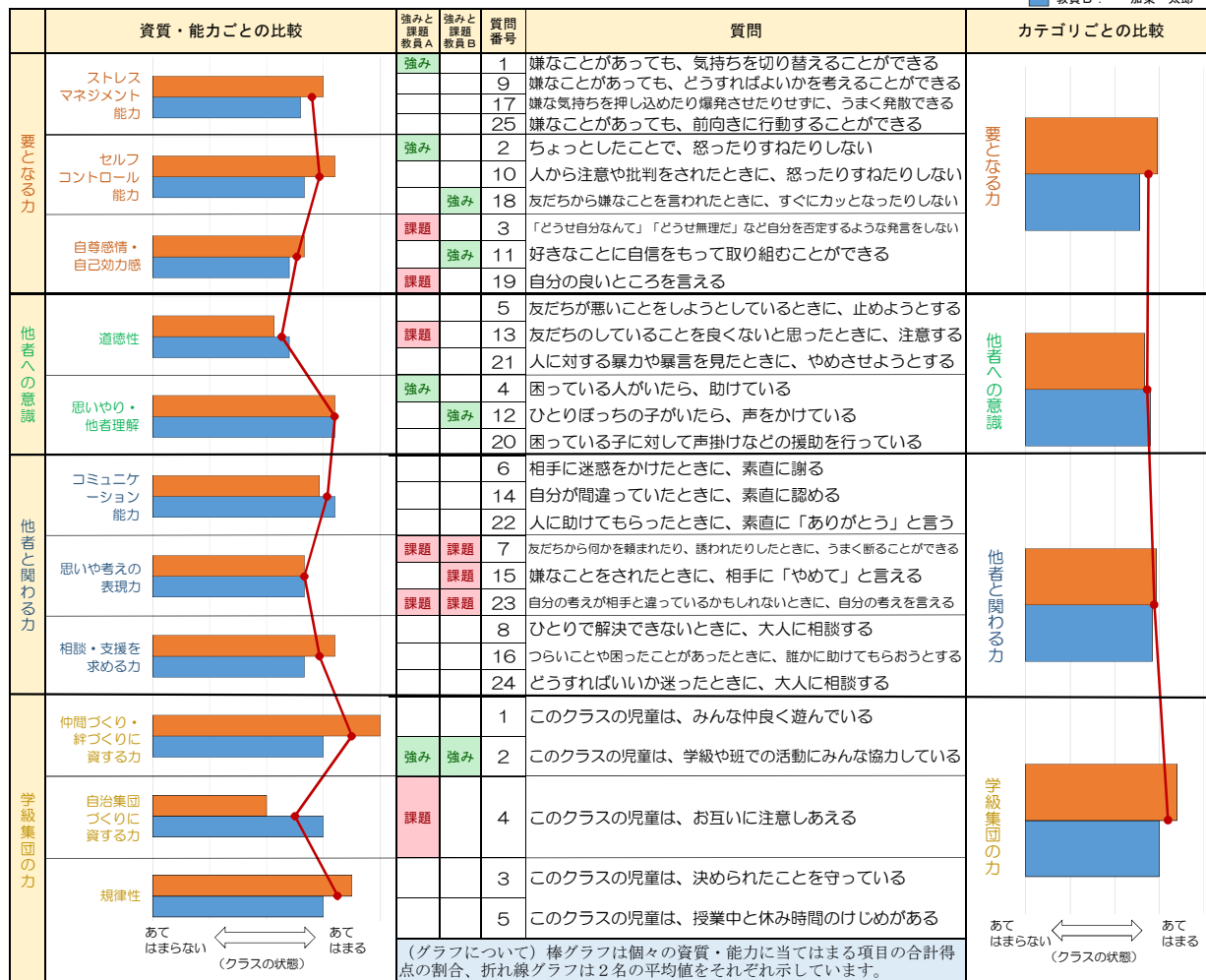
設問2 ①このクラスについて、あなたは次のような様子をどの程度に感じていますか。右の①の欄の4～1から当てはまる数字を1つ選んで○を記入してください。 ②また、これらの様子が現在、そのクラスの強みとなっていると感じるものであれば「○」を、課題となっていると感じるものであれば「×」を右の②の欄に記入してください(いくつでも構いません)。			
質問 番号	クラスの様子	①このような様子について… 4 3 2 1 と ま あ 全 そ そ そ う う う 思 思 思 う あ わ う う な い い	②そのクラスの… 強み○ 課題× (どちらでもないは空欄)
1	このクラスの児童は、みんな仲良く遊んでいる	4 3 2 1	
2	このクラスの児童は、学級や班での活動にみんな協力している	4 3 2 1	
3	このクラスの児童は、決められたことを守っている	4 3 2 1	
4	このクラスの児童は、お互いに注意しあえる	4 3 2 1	
5	このクラスの児童は、授業中と休み時間のけじめがある	4 3 2 1	

回答は以上です

※全ての回答が終われば、記入した数値等を付属の分析ツール（Excel）に入力してください

教員A： 兵庫 花子
教員B： 加東 太郎

1. 回答の結果



2. このクラスの強み

I 身についている児童が比較的多い資質・能力（平均値より）
1 仲間づくり・絆づくりに資する力 2 規律性 3 思いやり・他者理解
II 「強み」と感じている資質・能力（一致分）
このクラスの児童は、学級や班での活動にみんな協力している

3. このクラスの課題

III 身についている児童が比較的小さい資質・能力（平均値より）
1 道徳性 2 自治集団づくりに資する力 3 自尊感情・自己効力感
IV 「課題」と感じている資質・能力（一致分）
- 友だちから何かを頼まれたり、誘われたりしたときに、うまく断れる - 自分の考えが相手と違っているかもしれないときに、自分の考えを言える

4. 「授業プラン」

V 推奨される「授業プラン」（平均値より）
1 道徳性 「みんなのきもち」 「あだな」 「もしもの世界は良い世界？」
2 自治集団づくりに資する力 「みんなで挑戦！」 「カラーコピー大作戦」 「思いを形に！自分たちの目標」
3 自尊感情・自己効力感 「自分の木」 「大切なからだ」 「私ってどんな人？」

○上記は「III 身についている児童が比較的小さい資質・能力」の結果に対応する授業プランを表示しています。

○上から順に低・中・高学年用の授業プランを示していますが、該当学年でない授業プランもアレンジ次第で利用することができます。

I・IIIは上記折れ線グラフのそれぞれ上位・下位の3つの資質・能力を表示しています（児童の多さ）。II・IVはそれぞれ「強み」「課題」の回答が2名で一致した項目を表示しています（集団に対する影響）。これらを総合的に見て、クラスの今の状況の分析や、今後の対応策の検討に役立ててください。

「いじめ未然防止プログラム」の活用にかけるアンケート 「CoCoLo-J」 インベントリーシートの見方について

1 「1.回答の結果」について

(1) グラフについて

棒グラフの長さは、2名の先生が回答した“その項目に当てはまる児童数”を表しています。
グラフが長いほど該当児童の数が多くなります。

- ・左側のグラフ …「II の資質・能力」ごとの結果
- ・右側のグラフ …「カテゴリ」ごとの結果
- ・オレンジ色の棒グラフ…教員A(担任)による回答
- ・青色の棒グラフ …教員B(担任以外)による回答
- ・赤色の折れ線グラフ …教員A・教員Bの回答の平均値

(2) 「強みと課題」について

アンケートで「強み(○)」「課題(×)」と回答した項目を教員別に示しています。

2 「2.このクラスの強み」について

(1) 「I 身についている児童が比較的多い資質・能力」について

赤色の折れ線グラフ(2名の先生の平均値)の上位3つの資質・能力を示しています(同値の場合はグラフのより上側に記載されているものを表示)。

(2) 「II 「強み」と感じている資質・能力」について

2名の先生の回答に共通していた「強み」を表示しています。最大 10 項目まで表示されます。
共通しているものがない場合は空欄となります。

3 「3.このクラスの課題」について

(1) 「III 身についている児童が比較的少ない資質・能力」について

赤色の折れ線グラフ(2名の先生の平均値)の下位3つの資質・能力を示しています(同値の場合はグラフのより上側に記載されているものを表示)。

(2) 「IV 「課題」と感じている資質・能力」について

2名の先生の回答に共通していた「課題」を表示しています。最大 10 項目まで表示されます。
共通しているものがない場合は空欄となります。

4 「4.授業プラン」について

「III 身についている児童が比較的少ない資質・能力」で示された3つの資質・能力に対応する「いじめ未然防止プログラム」の「授業プラン」を3つずつ表示しています。上から低学年用、中学年用、高学年用の順に示されていますが、該当する学年のものでなくてもアレンジ次第で利用可能です。

「授業プラン」は、県立教育研修所 Web ページにある「いじめ未然防止プログラム」から授業案やワークシートをダウンロードできます。また、一部の「授業プラン」については教師用映像補助資料(解説動画)を見ることが可能です。



いじめ未然防止プログラム

「いじめ未然防止プログラム」の活用にかけるアンケート

「CoCoLo-J」インベントリーシートの活用について

* 結果をもとにした今後の取組検討についての留意点 *

(1) 本インベントリーシートの目的

「CoCoLo-J」は、「いじめをしない・させない・見逃さない」ことに関連する11の資質・能力の観点から、実施クラスの状況を視覚的に整理するものです。今後のいじめ未然防止への取組の指針を検討するための判断材料のひとつとして利用してください。

この結果は、回答した先生自身が感じている状況を整理し、可視化したものです。あくまで先生から見た児童の姿を整理したものであり、児童自身が回答したものではないことに留意してください。また、児童の見方は関わっている人によってさまざまです。2名の先生が回答するのは、児童の姿を複眼的にみて、より多角的・多面的な視点からクラスの状況を正確に理解するためです。

(2) グラフと「強み」「課題」の捉え方

グラフの長さは、回答した先生が「その項目に関連する児童が多いと考えているか、あるいは少ないと考えているか」を表しています。また、「強み」と「課題」はその資質・能力が「このクラスの強みとなっていたり課題となっていたりしているか」に対する先生自身の考えを示しています。ただし、インベントリーシートの結果だけからクラスの状況をすべて判断できるというわけではないことに注意してください。

例えば、すぐにカッとなる児童が数人おり、その数人がクラスに大きな影響力を与えている状況の場合には、質問18の「友だちから嫌なことを言われたときに、すぐにカッとなったりしない」という児童の数は多い（棒グラフが長い）といった、一見肯定的に見える回答結果になる場合があります。

この例のように、棒グラフの長さでクラスの「強み」や「課題」が一致しない場合もありますので、グラフ（児童の多さ）と「強み」「課題」（集団に対する影響）の両方の結果、さらにはクラスの実態を考え合わせて、今後の対応の在り方を検討するようにしてください。

<グラフと「強み」「課題」とを合わせた考察の例>

- ①グラフは比較的長い、含まれる項目に「課題」が表記されている

（状況例）その資質・能力に課題のある一部の児童のクラスへ与える影響力が大きい

（対応例）課題のある一部の児童への個別の対応

- ②グラフは比較的短い、含まれる項目に「強み」が表記されている

（状況例）その資質・能力が高い一部の児童のクラスへ与える影響力が大きい

（対応例 1）その一部の児童を生かした学級経営

（対応例 2）その一部の児童が辛い思いをしったり埋もれてしまったりしないような配慮

③グラフは比較的長く、含まれる項目に「**強み**」が表記されている

(状況例) その資質・能力が高い児童が多いことが、そのクラスの「強み」となっている

(対応例) その「強み」を軸とした学級経営

④グラフは比較的短く、含まれる項目に「**課題**」が表記されている

(状況例) その資質・能力が低い児童が多いことが、そのクラスの「課題」となっている

(対応例 1) その資質・能力を高めるための具体的な取組を実施

(対応例 2) 全体への取組(「授業プラン」の実施等)だけでなく、日常的な個別への働きかけの徹底や工夫

(3) 2名の先生の回答の比較

2名の先生の回答が共通しているものは、立場の違う先生から見ても同じようにクラスの様子が感じられているということです。2名の先生の回答が共通している項目はこのクラスの顕著な特徴であると捉えて、「強み」であればそれを生かし、「課題」であればそれを克服するような積極的な取組を実施してください。

一方、2名の先生の回答が大きく異なる場合は、立場や関わり方の違いによる別の視点からの有益な情報と捉えることができます。自分が教室にいない時のクラスの状況を正確に把握することは難しく、むしろ自分が教室にいない時の様子にこそ、そのクラスの本来の強みや課題が表れていることもあります。回答が異なっている項目に対して、2名の先生でそれぞれの理由や考えを共有し合うことで、クラスの状況や個々の児童に対する理解の幅を広げることが可能となります。

(4) 「いじめ未然防止プログラム」の「授業プラン」の選択と実施

「授業プラン」は「Ⅲ 身につけている児童が比較的少ない資質・能力」の結果をもとに、このクラスの「課題」を克服するという観点から提案されたひとつの具体案です。「授業プラン」を実施しようとお考えの際は、Web ページからダウンロードした授業案をそのまま実施するのではなく、このクラスの状況や児童の様子などに応じて適宜アレンジするなどして、より効果が高まるような授業案を考案されたうえで実施するようにしてください。

「授業プラン」はねらいとなる資質・能力を向上させる“きっかけ”となるものです。この授業で学んだことや体験したことを各種行事や児童会活動、日々の生徒指導に関する取組、掲示物等、様々な日々の活動と関連付けて継続的に実践していくことで効果的な取り組みになります。その際、「いじめ未然防止プログラム」の「特別活動プラン」が参考になると思います。是非活用してください。

なお、いじめ未然防止のためには「課題」の克服だけでなく、クラスの「強み」を生かしていく取組の継続も効果的です。「課題」の克服と「強み」を生かすことの両方の視点から、今後の取組を検討してください。

「いじめ未然防止プログラム」調査・研究・プログラム作成者名簿

氏 名	所属等（関係年度最終時の所属等）	関係年度
古川 雅文	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 所長 兵庫教育大学大学院 教授	H25
松本 剛	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 所長 兵庫教育大学大学院 教授	H25～R4
秋光 恵子	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 主任研究員 兵庫教育大学大学院 教授	H26～R4
北川 真一郎	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	H25～H27
宮垣 覚	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	H28
志摩 直樹	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	H29
稲次 一彦	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	H30
藤原 生也	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	R1～R2
泉村 靖治	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 副所長 兵庫県立教育研修所 教務部長	R3～R4
阿部 浩士	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 主任指導主事	H25
寺戸 武志	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 主任指導主事	H25～R3
増田 美佳子	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 主任指導主事	H27～H29
堀井 美佐	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 指導主事	H26
福田 裕子	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 指導主事	H29～R4
中谷 慎一郎	兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 指導主事	R3～R4
千歳 歆	兵庫県立教育研修所企画調査課 指導主事	R2～R3
藤原 一平	兵庫県立教育研修所義務教育研修課 指導主事	H27
乗松 宏美	兵庫県立教育研修所義務教育研修課 指導主事	H27～H28
西岡 健児	兵庫県立教育研修所 不登校対策推進に係る研修員	H28～H29
内藤 博祥	兵庫県立教育研修所 不登校対策推進に係る研修員	H30
石井 里枝	兵庫県立教育研修所 不登校対策推進に係る研修員	R1
中積 治樹	兵庫県立教育研修所 不登校対策推進に係る研修員	R2
中西 功	兵庫県立教育研修所 不登校対策推進に係る研修員	R3～R4
竹内 和雄	兵庫県立大学 准教授 兵庫県立大学ソーシャルメディア研究会	H27

（令和４年度３月末現在）